

朝日山(2)遺跡Ⅵ

—東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書—

2003年3月

青森県教育委員会



遺跡近景（北東から）



遺跡全景（合成写真、写真右下が北）



同左漆付着部アップ



同上断面



第109号竪穴住居跡出土内面に漆が付着した土師鉢坏

炭化物付着層（図65-1）炭化物断面



第101号井戸跡遺物出土状況



同上アップ



第101号井戸跡出土土具

序

青森平野の西側丘陵地には、国特別史跡の三内丸山遺跡（縄文時代前期・中期）が位置し、ここを中心とする半径5キロメートル以内に、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が集中しております。

今回報告する朝日山（2）遺跡も、それらの遺跡のひとつで、近接して縄文時代及び平安時代の良好な資料が出土した朝日山（1）・（3）遺跡があり、一部は発掘調査を実施しております。

この朝日山（2）遺跡の一部が、日本鉄道建設公団による東北新幹線建設事業の予定地となったため、平成12・13年度に発掘調査をおこない、平成12年度の調査については、当センターが報告書を刊行しました。

今回の報告は、平成13年度に当センターによっておこなわれた調査のものです。

調査の結果、平成12年度の調査と同様に、平安時代（9～11世紀）の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡のほか畠跡とみられる畝状の遺構などが発見されました。また、土師器・須恵器の土器や刀子・鉄鏃などの鉄製品が出土しております。これらの遺構・遺物を研究することによって、青森県にとって不明な点が多い、当時の集落の解明が進むものと考えられます。

この報告書は、これらの調査成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の資料として、ひろく活用されることを期待します。

調査の実施及び報告書の作成にあたって、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝申し上げます次第です。

平成15年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤良治

例言

- 1 本報告書は、平成13年度に発掘調査された東北新幹線建設事業に伴う、青森市朝日山(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在地は青森市大字細越字栄山内地で、青森県遺跡番号は01197である。
- 3 本報告書の作成は田中珠美、水谷真由美、成田滋彦が担当し、遺構と遺物の実測図と図版等の作成は調査補助員・整理作業員がおこなった。執筆者名は文末に、依頼原稿については文頭に記した。
- 4 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5000分の1地形図「青森西部」である。
- 5 挿図の縮尺は各図ごとにスケールを付してある。写真の縮尺は不統一である。
- 6 遺構・遺物の表現は原則として次の様式・基準に拠った。
 - (1) 図中の方位は座標北である。公共座標は旧日本測地系に基づいている。
 - (2) 遺構図面中にある土層断面図及び横断面図には、“-”の横に標高を付してある。
 - (3) 土層の注記は『新版標準土色帖』(小山・竹原 1996)を用いた。
 - (4) 遺物には観察表を付し、出土地点・法量及び諸特徴を一覧できるようにした。土器計測値は、「口径」については口縁部が、「底径」については底部が、「器高」については口縁部から底部まで遺存しているものの実測値を示している。表中の“()”の中の値は「口径」及び「底径」は推定値を、「器高」については現存値を表している。この他の石器・鉄製品・木製品・土製品・石製品の計測値はすべて現存値である。土器の残存率は、口径あるいは底径の残存率を1/2以上、1/4~1/2、1/4以下にわけて記した。なお、文中の遺物の出土数は接合後の破片数を示している。
 - (5) 本文・図版・観察表・写真図版の遺物番号は一致している。
 - (6) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡はピットの深さを図中に()で示した。また、住居跡の柱穴などは「ピット計測表」を設け、実際の深さのほか、床面からの深さも示した。
 - (7) 竪穴住居跡のカマドの主軸方位はカマドの煙道の方向が、北あるいは南からどれくらい傾いているかを計測したものである。軸方向は住居跡の壁が北からどれだけ傾いているかを計測したものである。
- 7 使用した遺構の略号は以下のとおりである。

S I = 竪穴住居跡 S K = 土坑 S E = 井戸跡 S B = 掘立柱建物跡 S D = 溝跡

これ以外の遺構には略号は用いなかった。
- 8 整理作業に伴い、第106・116・120号竪穴住居跡、第103・104・110・112~116・152・159・161・169・174・177・180号土坑、第106・108・110~112・121・122・133・138・141・143・144・146・148・149・151・155・156・161・163・173・178・179・182・193・196・202・210・214・216号溝跡を欠番とした。平成13年度調査の第101・102号竪穴住居跡は13年度に刊行した第324集に掲載した。第217~220号溝跡は平成14年度の調査成果とあわせて、15年度刊行予定の報告書に掲載する。また、平成12年度に調査した遺構のうち、第3・7・12・13号竪穴住居跡、第31号土坑、第8・9・29号溝跡は本報告書に掲載している。
- 9 資料の鑑定や試料の同定・分析については次の方々に委託した。(敬称略)

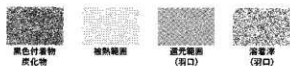
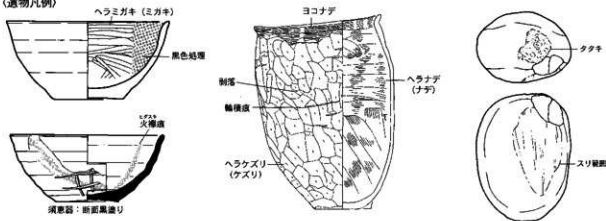
石器の石質鑑定	青森県文化財審議委員 松山 力
地質	青森県立郷土館 島口 天

- | | |
|------------------|-------------|
| 放射性炭素年代測定 | (株)地球科学研究所 |
| 出土火山灰の蛍光X線分析 | 大谷女子大学 三辻利一 |
| 出土須恵器の蛍光X線分析 | 大谷女子大学 三辻利一 |
| 樹種同定 | 木工舎ゆい 高橋利彦 |
| プラントオパール分析、花粉分析 | (株)古環境研究所 |
| 礫・土器表面付着物の断面構造調査 | (株)吉田生物研究所 |

- 10 引用・参考文献については巻末に収めた。
- 11 出土遺物、実測図、写真等は現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 12 発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、次の諸氏からご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。(順不同、敬称略)

北林八洲晴、藤原弘明、佐々木雅裕、高橋学、五十嵐一治

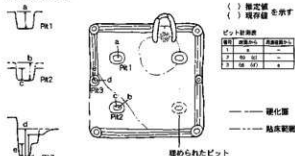
(遺物凡例)



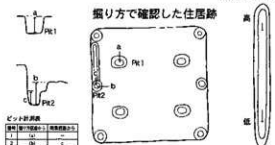
(遺構凡例)



(柱穴の深さ)



(溝底面の高低差)



目次

口絵

序

例言

目次

挿図目次・写真目次

第1章 調査の概要

第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	5
第4節 遺跡の地形と地質・基本層序	5

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡	7
第2節 掘立柱建物跡	87
第3節 土坑	94
第4節 井戸跡	109
第5節 溝跡	118
第6節 円形周溝	149
第7節 畝跡	150
第8節 遺構外出土遺物	155

第3章 自然科学的分析

第1節 朝日山(2)遺跡の放射性炭素年代測定結果報告	173
第2節 朝日山(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	175
第3節 朝日山(2)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	176
第4節 朝日山(2)遺跡出土材・炭化材の樹種	181
第5節 朝日山(2)遺跡の プラントオパール分析・花粉分析	189

第6節 朝日山(2)遺跡の礎・土器表面付着物の 断面構造調査	200
-----------------------------------	-----

第4章 まとめ

引用・参考文献	231
遺物観察表	232
写真図版	247
報告書抄録	315

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	0
図2 地形及び踏線	2
図3 遺構配置図	3
図4 基本層序	6
図5 第2号竪穴住居跡	8
図6 第3号竪穴住居跡(1)	9
図7 第3号竪穴住居跡(2)	10
図8 第12号竪穴住居跡	12
図9 第13号竪穴住居跡(1)	14
図10 第13号竪穴住居跡(2)	16
図11 第13号竪穴住居跡(3)	18
図12 第13号竪穴住居跡(4)	19
図13 第13号竪穴住居跡(5)	20
図14 第103号竪穴住居跡(1)	22
図15 第103号竪穴住居跡(2)	23
図16 第104号竪穴住居跡(1)	25
図17 第104号竪穴住居跡(2)	26
図18 第105号竪穴住居跡	27
図19 第107号竪穴住居跡(1)	29
図20 第107号竪穴住居跡(2)	32
図21 第107号竪穴住居跡(3)	33
図22 第107号竪穴住居跡(4)	34
図23 第108号竪穴住居跡	36
図24 第109 I・II号竪穴住居跡(1)	38
図25 第109 I・II号竪穴住居跡(2)	39
図26 第110号竪穴住居跡	41
図27 第111号竪穴住居跡	43
図28 第112号竪穴住居跡	46
図29 第113号竪穴住居跡(1)	48
図30 第113号竪穴住居跡(2)	49
図31 第113号竪穴住居跡(3)	50
図32 第114号竪穴住居跡	51
図33 第115号竪穴住居跡(1)	53

図34 第115号竪穴住居跡(2)	54
図35 第117号竪穴住居跡	55
図36 第118・119号竪穴住居跡(1)	57
図37 第118・119号竪穴住居跡(2)	58
図38 第121・122号竪穴住居跡(1)	60
図39 第121・122号竪穴住居跡(2)	61
図40 第123号竪穴住居跡	64
図41 第124 I・II号竪穴住居跡	68
図42 第124 I号竪穴住居跡	69
図43 第124 II号竪穴住居跡	73
図44 第125号竪穴住居跡(1)	75
図45 第125号竪穴住居跡(2)	76
図46 第126号竪穴住居跡	77
図47 第127号竪穴住居跡	80
図48 第128号竪穴住居跡(1)	83
図49 第128号竪穴住居跡(2)	85
図50 第101・103・105・106号掘立柱建物跡	88
図51 第104号掘立柱建物跡	89
図52 第107・114号掘立柱建物跡(1)	91
図53 第107・114号掘立柱建物跡(2)	92
図54 土坑 a 類(1)	95
図55 土坑 a 類(2)	96
図56 土坑 a 類(3)	97
図57 土坑 b 類(1)	99
図58 土坑 b 類(2)	100
図59 土坑 b 類(3)	101
図60 土坑 b 類(4)	102
図61 土坑 c 類(1)	104
図62 土坑 c 類(2)	105
図63 土坑 d 類	106
図64 第101号井戸跡	110
図65 第102・103・107号井戸跡	112
図66 第104・105号井戸跡	113

図67	第106・108～110号井戸跡	115
図68	第110号井戸跡出土遺物	117
図69	第9・101～104・129・141号溝跡	120
図70	第29・105・107・119号溝跡	121
図71	第109・117・118・128・154号溝跡	122
図72	第115・116・125号溝跡、第109・118号溝跡出土遺物	123
図73	第114・197～199号溝跡	124
図74	第120・130・139号溝跡	125
図75	第123・137・164号溝跡	126
図76	第123・164号溝跡出土遺物	127
図77	第131・132・150号溝跡	128
図78	第135号溝跡	129
図79	第135号溝跡出土遺物(1)	130
図80	第135号溝跡出土遺物(2)	131
図81	第142・147・167・168・204号溝跡	132
図82	第152・153・226号溝跡	133
図83	第153号溝跡出土遺物	134
図84	第165・229～231号溝跡	135
図85	第169号溝跡	136
図86	第172・187号溝跡	138
図87	第174・180・181・223・224号溝跡	139
図88	第175号溝跡	141
図89	第177号溝跡	142
図90	第186・195・203号溝跡	143
図91	第188・189・206・208・209・221・225号溝跡	144

図92	第192・205・207・211・212・215・232号溝跡	145
図93	第213・222・227・228号溝跡	146
図94	第101号円形周溝	149
図95	第101～103号竪溝	153・154
図96	遺構外出土遺物(1)	157
図97	遺構外出土遺物(2)	158
図98	遺構外出土遺物(3)	159
図99	遺構外出土遺物(4)	161
図100	遺構外出土遺物(5)	162
図101	遺構外出土遺物(6)	165
図102	遺構外出土遺物(7)	166
図103	遺構外出土遺物(8)	167
図104	遺構外出土遺物(9)	168
図105	遺構外出土遺物(10)	170
図106	遺構外出土遺物(11)	171
図107	竪穴住居跡の分類	203
図108	竪穴住居跡の配線と軸方向・規模・住居構造	205
図109	朝日山遺跡部の遺構配置	208・209
図110	竪穴住居跡の住居構造と規模	210
図111	竪穴住居跡の軸方向	210
図112	竪穴住居跡のカメラ主軸方位	211
図113	土坑の分布	221
図114	火山灰堆積状況	222
図115	へう記号土器集成	228

写真目次

写真1	現況・作業風景	248
写真2	第3号竪穴住居跡	249
写真3	第12・13号竪穴住居跡(1)	250
写真4	第12・13号竪穴住居跡(2)	251
写真5	第103号竪穴住居跡(1)	252
写真6	第103号竪穴住居跡(2)・第105号竪穴住居跡	253
写真7	第104・112号竪穴住居跡	254
写真8	第107・108・111・113号竪穴住居跡	255
写真9	第107・111号竪穴住居跡	256
写真10	第108・114号竪穴住居跡	257
写真11	第109・110号竪穴住居跡	258
写真12	第113号竪穴住居跡(1)	259
写真13	第113号竪穴住居跡(2)・第117号竪穴住居跡	260
写真14	第115号竪穴住居跡(1)	261
写真15	第115号竪穴住居跡(2)・第123号竪穴住居跡	262
写真16	第118・119・127号竪穴住居跡	263
写真17	第121・122号竪穴住居跡	264
写真18	第124号竪穴住居跡(1)	265
写真19	第124号竪穴住居跡(2)	266
写真20	第124号竪穴住居跡(3)	267
写真21	第125・126号竪穴住居跡(1)	268
写真22	第125・126号竪穴住居跡(2)・第128号竪穴住居跡(1)	269
写真23	第128号竪穴住居跡(2)	270
写真24	第128号竪穴住居跡(3)	271
写真25	土坑a類(1)	272
写真26	土坑a類(2)・b類(1)	273
写真27	土坑b類(2)	274
写真28	土坑b類(3)	275
写真29	土坑b類(4)	276
写真30	土坑b類(5)	277
写真31	土坑c類(1)	278
写真32	土坑c類(2)・d類(1)	279
写真33	土坑d類(2)・円形周溝	280
写真34	井戸跡(1)	281
写真35	井戸跡(2)	282

写真36	第101～104・109・116・128・129・141号溝跡	283
写真37	第114・120・197～199号溝跡	284
写真38	第126・127・168号溝跡	285
写真39	第123・130・131号溝跡	286
写真40	第114・135・136・139・150・152・153・157・175・198・226号溝跡	287
写真41	第164・169号溝跡	288
写真42	第165・192・208・211・212・232号溝跡	289
写真43	第114・136・153・172・174・175・180・195・197～199・203号溝跡	290
写真44	第153・172・174・175・180・186・195号溝跡	291
写真45	第177・181・186・195・228号溝跡	292
写真46	第101～103号竪穴(1)	293
写真47	第101～103号竪穴(2)	294
写真48	第3・12・13号竪穴住居跡出土遺物	295
写真49	第13・103・104・107号竪穴住居跡出土遺物	296
写真50	第107号竪穴住居跡出土遺物	297
写真51	第107～111・113号竪穴住居跡出土遺物	298
写真52	第113～115・119号竪穴住居跡出土遺物	299
写真53	第121～125号竪穴住居跡出土遺物	300
写真54	第126・128号竪穴住居跡・第104号掘立建物跡・土坑出土遺物(1)	301
写真55	土坑出土遺物(2)	302
写真56	土坑出土遺物(3)・第101・103号井戸跡出土遺物	303
写真57	第105・107・110号井戸跡出土遺物	304
写真58	溝跡出土遺物(1)	305
写真59	溝跡出土遺物(2)	306
写真60	溝跡出土遺物(3)・岳跡出土遺物	307
写真61	遺構外出土遺物(1)	308
写真62	遺構外出土遺物(2)	309
写真63	遺構外出土遺物(3)	310
写真64	遺構外出土遺物(4)	311
写真65	遺構外出土遺物(5)	312
写真66	遺構外出土遺物(6)	313
写真67	壺書・へう記号集成	314

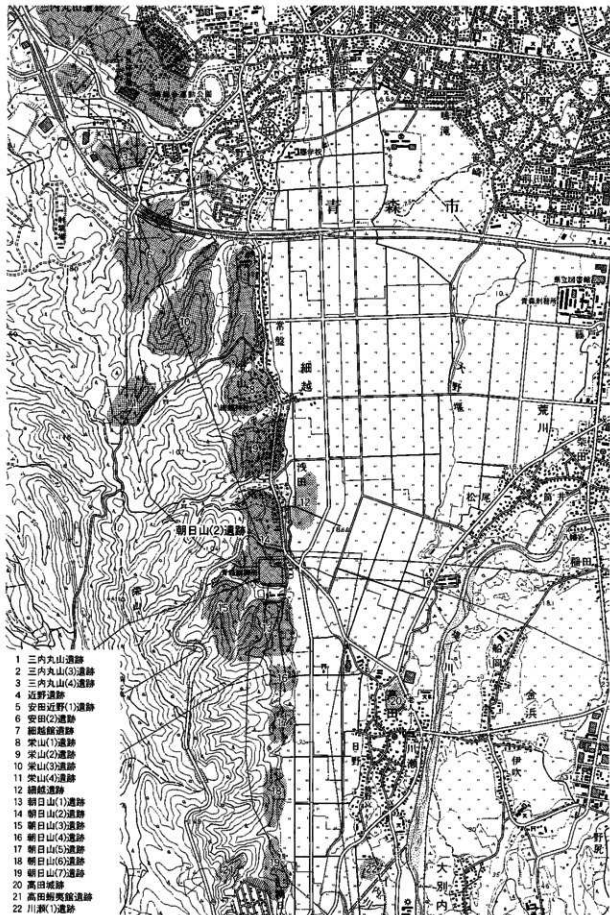


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1章 調査の概要

第1節 調査要項

1 調査目的

東北新幹線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する朝日山(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成13年6月1日～同年10月31日

3 遺跡名及び所在地 朝日山(2)遺跡（青森県遺跡番号01197）
青森市大字細越字栄山391-6、外

4 調査面積 3,200平方メートル

5 調査委託者 日本鉄道建設公団

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員	市川金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査員	藤沼邦彦	弘前大学人文学部教授（考古学）
	島口 天	青森県立郷土館研究員（現 学芸主査。地質学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所 長	中島 邦夫（現 青森県立郷土館館長）
	次 長	成田 誠治（平成14年3月退職）
	総務課長	西口 良一（現 商工観光労働部労政・能力開発課総括主幹）
	調査第二課長	福田 友之（現 次長）
	文化財保護主事	田中 珠美
		水谷真由美
調査補助員	岩間 陽子、田中 稔大	
	立花 聡美、佐々木順子	

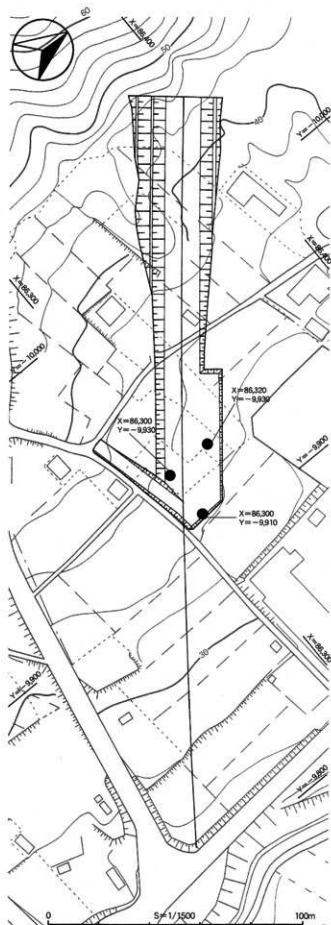


図2 地形及び路線図

第2節 調査方法

グリッド及び標高値は平成12年度の調査で設定したものを継続して使用した。グリッドは旧日本測地系 $X=86,300$ ・ $Y=-9,910$ 、 $X=86,300$ ・ $Y=-9,930$ 、 $X=86,320$ ・ $Y=-9,930$ を基準とし、一辺20mの大グリッドに基づく 4×4 mの小グリッドを設定した。グリッドは西から東にA～Yの25文字のアルファベット、北から南に算用数字を付し、グリッド名は北西の杭番号のアルファベットと算用数字の組み合わせにより呼称した。東西方向はアルファベットの数を越えるため、超過分はAA・AB・ACと2文字を組み合わせ呼称した。標高値は調査区付近の工事用基準点から移設し、適宜移動した。

遺構精査は適宜セクションベルトを設け、20分の1の縮尺を原則とする遺り方測量でおこなった。遺構番号は種類ごとに、確認順あるいは調査着手順に付し、平成13年度の遺構番号はすべて101号からとした。遺構名は竪穴住居跡＝SI、土坑＝SK、井戸跡＝SE、掘立柱建物跡＝SB、溝跡＝SDの略号を用いた。土層の名称は、基本層序は表土から下位にローマ数字を、細分される土層にはさらに小文字のアルファベットを付した。遺構内堆積土は上位から下位に算用数字を付した。土層観察は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を用いて注記した。遺物取り上げはグリッドあるいは遺構単位で層位ごとにおこなった。写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル及びモノクローム、カラーネガフィルムの3種類のフィルムを使用した。

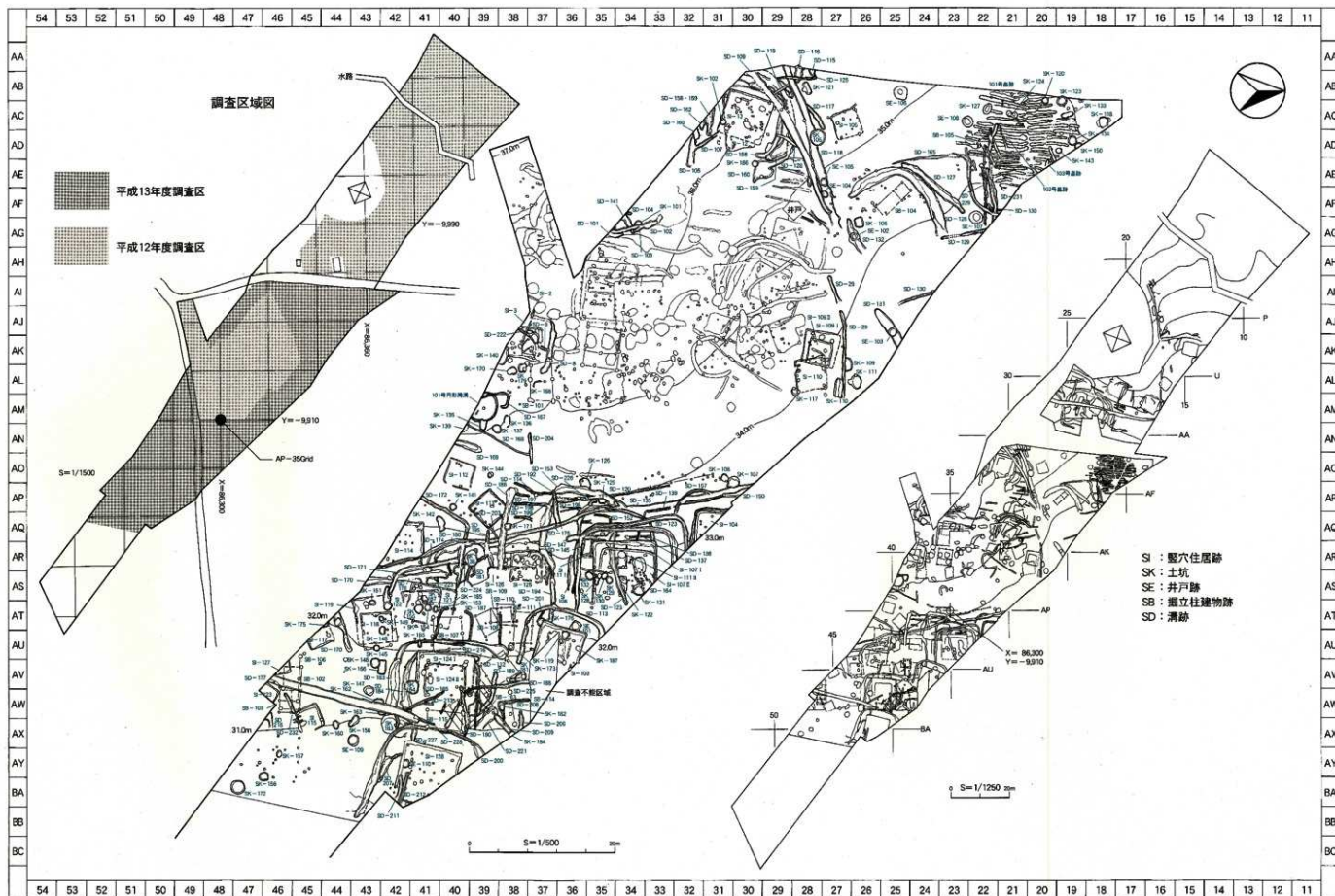


图3 遺構配置圖

第3節 調査経過

6月1日、調査器材等の搬入と環境整備をおこなった。調査区をほぼ東西に横切る道路の北側の調査に着手することとし、昨年調査区内に仮置きした排土を調査終了部分に移動した。その後、表土除去と遺構確認をおこなった。表土除去は薄い部分を中心に人力でおこなったが、一部厚層が厚く、遺物が混入しない箇所は職員が立ち会い重機を用いた。6月下旬には本格的に遺構精査に着手した。北側部分は遺構の密度は高くはないものの、第V層上面で土坑や井戸跡、畠跡などが検出された。昨年調査区に隣接する部分では遺構の密度が昨年以上に高く、住居跡・土坑・溝跡が集中して検出された。特に第107号竪穴住居跡周辺には住居跡や溝跡が集中し、住居跡は軸線はほぼ同じに、位置を少しずつ移動して何度も構築され、これらの住居跡に伴う外周溝は溝跡と重複し、遺構の全体形・新旧関係の把握と図面の作成にかなりの時間を要した。また、中央部には沢地形があり、降雨の度に調査区内の雨水が集中し、遺構が水没して、精査が中断するなど苦勞した。8月20日、道路北側のラジコンヘリによる空中写真を撮影し、道路の付け替えをおこない、9月からは道路下及び道路南側の調査に着手した。道路南側は耕作土が厚い部分があり、表土除去に重機を用いた。遺構検出面までは最も厚いところで1mにも達した。遺構確認の結果、これまでと同様、調査区南端に至るまで遺構の密度が高く、住居跡・溝跡が集中して検出され、図面の作成にかなりの時間を要した。南側で検出された住居跡の多くは畑地の造成時に床面まで削平され、住居の全体像の把握に苦勞した。調査区南端は今年度中の調査終了を断念し、来年度の調査区に含めることとし、遺構確認のみにとどめた。10月24日に南側部分のラジコンヘリによる空中写真撮影をおこない、10月31日、本年度の調査を終了した。

(田中)

第4節 遺跡の地形と地質・基本層序

青森県立郷土館 島口 天

周辺地域の地形および地質の概要は『県埋蔵文化財調査報告書第298集 朝日山(2)遺跡』で述べ、本遺跡の地形の概要については『県埋蔵文化財調査報告書第324集 朝日山(2)遺跡Ⅳ』で述べたので省略する。ここでは、本遺跡の平成13年度調査区の地形および地質・基本層序についてのみ記述する。

(1) 地形

本遺跡における今回の調査区は、平成12年度調査区の南東部を北西-南東方向に拡大した場所で、東に向かって緩く傾斜している。標高は32~43m、勾配は100/1000以下である。

(2) 地質

本遺跡内に堆積する黒ボク土は、平成12年度調査区の中央付近が最も厚く、東西方向へ薄くなる傾向がある。今回の調査区で基本層序を決めた中央部と東部でも黒ボク土は薄く、どちらも耕作による攪乱を受けており層序区分はできない。そして、中央部より東部の黒ボク土の方が薄い。

次に中央部および東部の基本層序について記述するが、今回の調査区が平成12年度の調査区と隣接することから、層の番号は『第324集 朝日山(2)遺跡Ⅳ』の番号を使用して関連性を示す。

① 中央部の基本層序 (A)

第I層 黒色土層 (10YR2/1 厚さ20cm) 耕作土。締まりがなく、崩れやすい。耕作による削平および攪乱を受けており、下位層の粒子の混入が多い。

第VI層 黒褐色土 (10YR2/2 厚さ10cm) 第I層と第VII層の漸移層。

第VII層 黄褐色粘土質火山灰層 (10YR5/6 厚さ6cm以下) 粘性が高くローム質である。十和田一戸テフラ起源であると考えられる。

第VIII層 黄褐色～褐色砂質粘土層 (厚さ50cm以上) 粘性が高く締まりがある。上部は、両錐型石英の中粒サイズ以下の砂粒や細レキを含み、より砂質でやや崩れやすい。下部は固く締まりがあり、炭化物と思われる黒色の薄い層が断片的にみられたり、鉄分によると思われる褐色を呈する部分がみられる。細レキを含む砂質の部分もあるが、いずれも水平方向への連続性に乏しい。植物の根の進入跡と思われる縦方向に延びた筋状の様相が、下部に多くみられる。

② 東部の基本層序 (B)

第I層 黒色土層 (10YR2/1 厚さ7cm以下) 耕作土。締まりがなく、崩れやすい。第VIII層との境が直線的で明瞭であることから、耕作のために持ち込まれたものと考えられる。

第VIII層 黄褐色～褐色砂質粘土層 (厚さ60cm以上) 上部は、両錐型石英の中粒サイズ以下の砂粒や細レキを含む。下部は固く締まりがあり、鉄分によると思われる褐色を呈する部分や砂質の部分が見られる。全体的に植物根の進入跡と思われる縦方向に延びた筋状の様相がみられる。

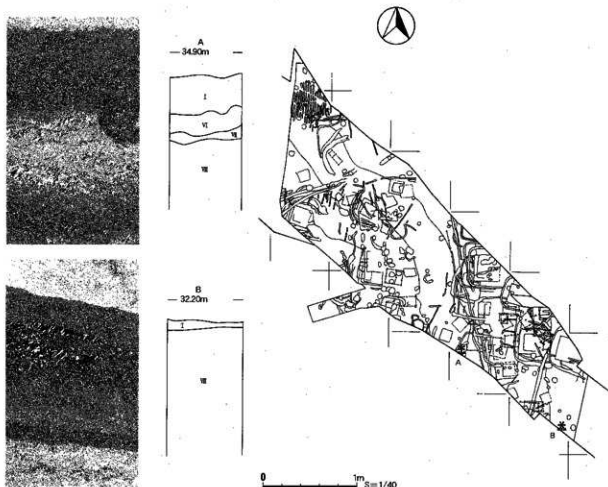


図4 基本層序

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

平成13年度に検出された竪穴住居跡は26軒である。検出状況は昨年度とほぼ同様で、標高31～36mの緩やかな東斜面に構築されている。単独で立地するものもみられるが、ほぼ同じ場所に繰り返し構築されるものが多く、重複が著しい。床面・または掘り方で検出された住居跡が多く、カマドが残存するものは少数で、出土遺物も少ない。住居跡の検出面は斜面上位では第V層、斜面下位では第VII・VIII層であるが、第III・IV層から掘り込まれていたと考えられる。

遺構番号は101号から付したが、第101・102号竪穴住居跡は第324集に報告済みである。第106号竪穴住居跡は第12号竪穴住居跡の一部と判明したため、第116・120号竪穴住居跡はその後の調査において風倒木痕と判明したため、欠番とした。12・13年度にわたって調査した、第3・12・13号竪穴住居跡は本書で報告する。第7号竪穴住居跡については今年度の調査によって住居跡ではないことが判明し、欠番とした。また、今年度の調査で、第324集で報告した第2号竪穴住居跡の一部が検出されたため、再掲することとした。

第2号竪穴住居跡（図5）〔再掲〕

〔位置・確認〕 AI～AK-37・38グリッドに位置し、標高約36mである。第3号竪穴住居跡の堆積土掘り下げ中に周溝の一部を検出した。

〔重複〕 第3号竪穴住居跡・第5号土坑(第324集で報告済)・第222号溝跡と重複し、本住居跡は土坑より古く、他の遺構より新しい。

〔平面形・規模〕 南側は調査区外にのびる。北壁7.1mで、東壁は削平により残存しない。平面形は方形を呈すると考えられる。

〔堆積土〕 第3号住居跡E-Fセクションの第1～5層が本住居跡の堆積土で、暗褐色土を主体とする。第2・3層はビット堆積土、第4・5層は床構築土である。

〔床面〕 面的には検出できなかったが、第3号住居跡の堆積土上にロームが混入する暗褐色土で構築されている。床面全体に5cm程度の起伏がある。掘り方底面は緩やかな起伏をもつ。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔柱穴〕 ビット1・4は住居隅、ビット2・3は周溝内に位置し、ビット3はビット1・4の中間に位置する。規模は径24～58cm、検出面からの深さは11～55cmで、推定される床面からの深さは約20～70cmである。ビット4は第3号住居跡床面で検出され、床面検出の焼土に一部覆われており、第3号住居跡に伴う可能性もある。

〔周溝〕 幅10～30cm、深さ6～26cmの周溝が検出された。

〔ビット〕 2基検出された(ビット5・6)。第3号住居跡床面を掘り込んでおり、本住居跡に伴うと考えられる。規模は径22～30cm、検出面からの深さは11～55cmである。

〔出土遺物〕 今年度の調査では出土しなかった。

〔小結〕 住居隅及び壁際に柱穴をもつ構造と考えられる。出土遺物も少なく、住居跡の時期は明確では

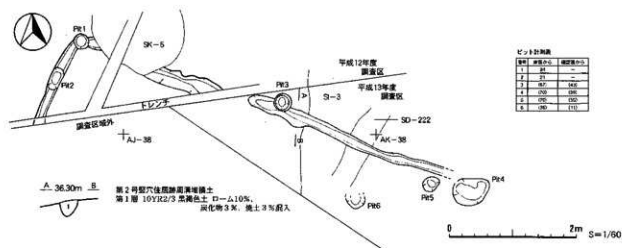


図5 第2号堅穴住居跡

ないが、重複する第3号住居跡堆積土に火山灰が混入することから10世紀中葉頃と推測される。(田中)

第3号堅穴住居跡 (図6・7)

[位置・確認] AJ・AK-37・38グリッドに位置し、標高約36mである。第Ⅶ層上面で確認された。

[重複] 第2号堅穴住居跡・第140号土坑・第9・222号溝跡と重複し、第140号土坑との新旧関係は不明であるが、第2号住居跡・第9・222号溝跡より古い。

[平面形・規模] 南側は調査区外にのびる。北東隅は削平により残存しないが、北壁は5.2mと推定される。東西壁は一部が検出され、検出された長さは東壁4.4m、西壁3.0mである。壁高は東壁0cm、西壁9~31cmで、壁は開きながら立ち上がる。東壁は西壁に対して平行ではなく、平面形は北壁が長い台形を呈すると考えられる。また、北壁と東壁では周溝が二重に回り、拡張前の住居跡と考えられ、北壁は4.0mと推定される。

[堆積土] A-Bセクションで5層、C-Dセクションで8層、E-Fセクションで6層(第6~11層)に分層され、ローム・炭化物・焼土が混入する暗褐色土を主体とする。堆積土上層には火山灰が少量混入している。床面直上には焼土が散在していた。

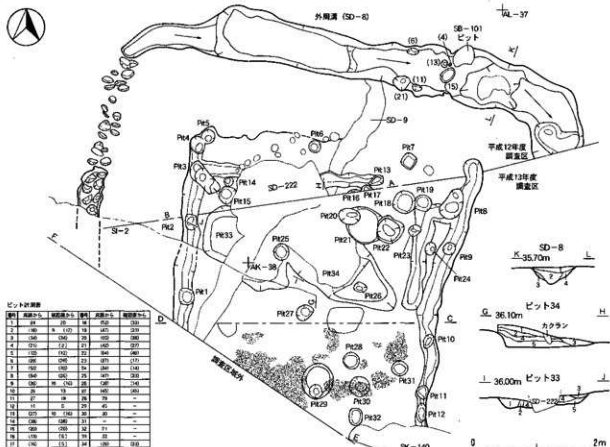
[床面] 南側のみ検出された。第Ⅶ層をそのまま床面としている部分とロームが混入する暗褐色土で床を構築している部分がある。床面は全体に緩やかな起伏があり、堅く締まっていない。北側では削平のため、掘り方が検出されたのみである。

[カマド] 検出されなかった。

[柱穴] ビット1~13が柱穴と考えられる。ビット4・5は北西隅、ビット1・2・6・9~12は周溝内に位置する。ビット3・8・13は拡張前の住居跡に伴うと考えられ、ビット3・8は住居内に、ビット13は周溝内に位置する。

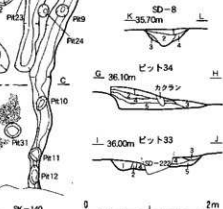
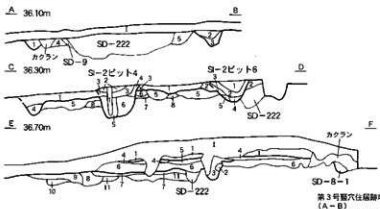
[周溝] 東西壁直下に幅12~34cm、深さ2~24cmの周溝が検出された。また、拡張前の住居跡の周溝は壁から10~40cm内側に検出され、幅18~34cm・深さ1~16cmである。

[ビット] 19基検出された(ビット14~32)。径50cm以上の楕円形と径20~30cmの円形を呈するもの



ピット記録簿

ピット	面積(m ²)	掘削深さ(m)	掘削日	掘削者	掘削時間
1	24	10	92	502	330
2	80	8	121	581	405
3	100	10	92	502	360
4	170	12	121	581	480
5	100	10	92	502	360
6	100	10	92	502	360
7	100	10	92	502	360
8	100	10	92	502	360
9	100	10	92	502	360
10	100	10	92	502	360
11	100	10	92	502	360
12	100	10	92	502	360
13	100	10	92	502	360
14	100	10	92	502	360
15	100	10	92	502	360
16	100	10	92	502	360
17	100	10	92	502	360
18	100	10	92	502	360
19	100	10	92	502	360
20	100	10	92	502	360
21	100	10	92	502	360
22	100	10	92	502	360
23	100	10	92	502	360
24	100	10	92	502	360
25	100	10	92	502	360
26	100	10	92	502	360
27	100	10	92	502	360
28	100	10	92	502	360
29	100	10	92	502	360
30	100	10	92	502	360
31	100	10	92	502	360
32	100	10	92	502	360
33	100	10	92	502	360



- 第2・3号竪穴住居跡層構土 (C-D)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, ロームブロック5%, 炭化物2%, 焼土2%, 黒褐色土7%混入
 - 第2層 10YR2/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物3%, 焼土2%, 黒色土30%混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物1%, 火山灰1%混入
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物2%, 黒褐色土10%混入
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, ロームブロック15%, 炭化物2%, 焼土1%, 黒褐色土25%混入
 - 第6層 10YR2/3 暗褐色土 ローム3%, 炭化物1%混入
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物1%混入
 - 第8層 10YR4/6 黄褐色土 ローム, 暗褐色土3%混入
- (E-F)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物1%, 黒褐色土10%混入
 - 第2層 10YR5/3 暗褐色土 ローム, 黒褐色土30%混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物1%, 黒褐色土30%混入
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム30%, 炭化物2%混入
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15%, 炭化物1%混入
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物1%, 焼土1%混入
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物1%, 焼土3%混入
 - 第8層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物2%, 焼土7%混入
 - 第9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15%, 炭化物1%, 焼土5%混入
 - 第10層 10YR3/3 暗褐色土 ローム20%, 焼土1%混入
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 ローム25%, 炭化物2%, 黒褐色土10%混入

- 第2号竪穴住居跡ピット4層構土
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3%, 炭化物3%混入
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物3%, 焼土1%混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物2%, 火山灰2%混入
 - 第4層 10YR3/2 暗褐色土 ローム7%, 炭化物2%混入
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム20%, ロームブロック15%, 炭化物3%混入
 - 第6層 10YR2/3 暗褐色土 ローム7%, 炭化物3%, 焼土3%混入
- 第2号竪穴住居跡ピット6層構土
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物1%, 焼土1%, 黒褐色土15%混入
 - 第2層 10YR2/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物3%, 焼土2%, 黒色土30%混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15%, 炭化物1%混入
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム35%, 炭化物5%混入
 - 第5層 10YR5/8 黄褐色土 ローム, 黒褐色土15%, 暗褐色土20%混入
- 第3号竪穴住居跡層構土 (A-B)
- 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム混入
 - 第2層 10YR4/4 褐色土 粘土層, ローム5%, 暗褐色土混入
 - 第3層 10YR4/4 暗褐色土 ローム5%, 焼土20%, 炭化物3%, 焼土1%混入
 - 第4層 10YR4/4 暗褐色土 ローム混入
 - 第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%, 粘土20%, 炭化物2%, 焼土1%混入
- (C-H)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3%, 炭化物2%, 黒褐色土10%, 焼土1%混入
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物2%, 焼土1%混入
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム15%, ロームブロック25%, 炭化物2%, 焼土1%混入
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%, 炭化物2%, 焼土7%混入
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 ローム30%, ロームブロック15%, 炭化物3%, 焼土1%混入
- 第3号竪穴住居跡ピット3層構土 (I-J)
- 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム15%, 炭化物2%, 焼土10%混入
 - 第2層 10YR2/2 暗褐色土 ローム3%, 炭化物2%混入
 - 第3層 10YR4/4 褐色土 ローム7%, 炭化物2%混入
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%, 炭化物2%, 焼土1%混入
 - 第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7%, ロームブロック3%, 炭化物2%混入
- 第3号竪穴住居跡外周溝 (溝号不明) 層構土 (E-G)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%, 炭化物1%混入
- (H-L)
- 第1層 10YR4/4 褐色土
 - 第2層 10YR4/6 黄褐色土
 - 第3層 10YR6/6 黄褐色土 暗褐色土1%混入
 - 第4層 10YR5/6 黄褐色土

図6 第3号竪穴住居跡 (1)

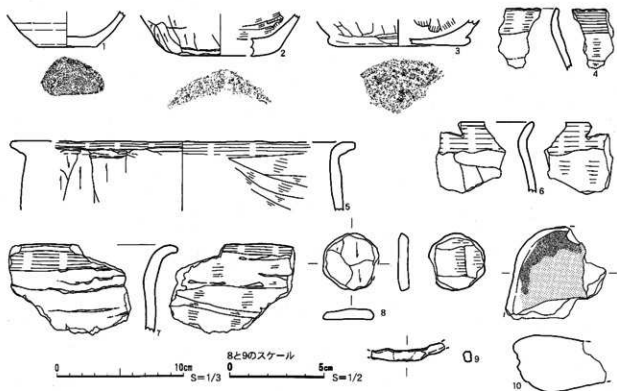


図7 第3号竪穴住居跡(2)

がみられ、検出面からの深さは5~46cm・床面からの深さ13~64cmでバラツキがある。

[土坑] ほぼ中央部に2基検出された(ピット33・34)。重複などにより規模は明確ではないが、どちらも長軸1.8m前後の楕円形を呈すると考えられる。

[外周溝] 第8号溝跡が外周溝と考えられる。住居北側から西側にかけて構築され、調査区外にのびる。住居跡からは0.8~1.3m離れている。幅25~90cm・深さ3~27cmで、底面は東に傾斜し、部分的に深く掘り込まれているが、西側が浅く、底面に耕具痕がみられる。

[出土遺物] 住居跡堆積土から土師器坏7点・甕34点・製塩土器12点、須恵器壺6点・大甕が7点出土している。床面から土師器甕2点・皿1点が出土している。この他に堆積土から、土師器甕胴部片を利用した土製円盤が1点出土している(図7-8)。縁辺を両面から打ち欠いて成形している。ピット堆積土から被熱し、外面に炭化物が付着した礫が1点出土している(図7-10)。

[小結] 周溝と壁際に柱穴をもつ構造と考えられる。内側にも周溝が検出され、拡張がおこなわれたと考えられる。時期は明確ではないが、堆積土に火山灰が混入することから、10世紀前半から中葉と推測される。

(田中)

第12号竪穴住居跡 (図8)

[位置・確認] AB～AD-29～31グリッドに位置し、標高約36.5mである。平成12・13年度にわたって調査をおこなった。12年度は北側を調査し、第Ⅵ層上面で暗褐色土が混入する褐色土のプランとして確認した。13年度は南側を調査し、第Ⅶ層上面でカマドの焼土を確認した。12年度の段階では床面は検出されず、住居跡の重複は確認できたが、個々のプランが明確でなく、第12・13号竪穴住居跡として調査していた。13年度の調査の結果、それぞれの住居跡の全容が明らかになり、本住居跡を第12号住居跡として報告する。

[重複] 第13号竪穴住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 南壁と東壁の一部が検出された。南壁は7.7mである。住居跡の軸方向はN-8°-Wである。

[堆積土] 11層に分層された。黒褐色土を主体とする。

[床面] カマド周辺のみ検出できた。床面はロームが混入する黒褐色土で構築されている。第13号住居跡堆積土を掘り込み、その上に黒褐色土で床面を構築したと考えられる。

[カマド] 南壁東側に焼土が検出され、カマドの痕跡と考えられる。焼土は約1mの範囲に20～60cmのブロック状に散在し、袖や天井部の崩落土と考えられる。

[柱穴] 5基検出された(ピット1～5)。ピット2は南西隅に、ほかは壁際に位置する。

[周溝] 南壁の一部でのみ検出された。幅16～24cm、深さ1～5cmである。

[ピット] 19基検出された(ピット6～24)。ピット24は床面で検出されたが、他は第13号住居跡と重複する部分に位置し、いずれの住居跡に伴うかは不明である。

[出土遺物] 床面がほとんど残存しないため、遺物は少ない。土師器坏1点・甕1点、須恵器大甕1点を図示した。

[小結] 床面の大部分が削平され、出土遺物も少なく、住居構造など不明な点が多い。時期については、本住居跡と重複する第13号住居跡最上層に白頭山火山灰が堆積すること、第13号住居跡は自然堆積と考えられることから、本住居跡は白頭山火山灰降下後、しばらくたってから構築された住居と考えられ、10世紀中葉頃の構築と推定される。

(田中)

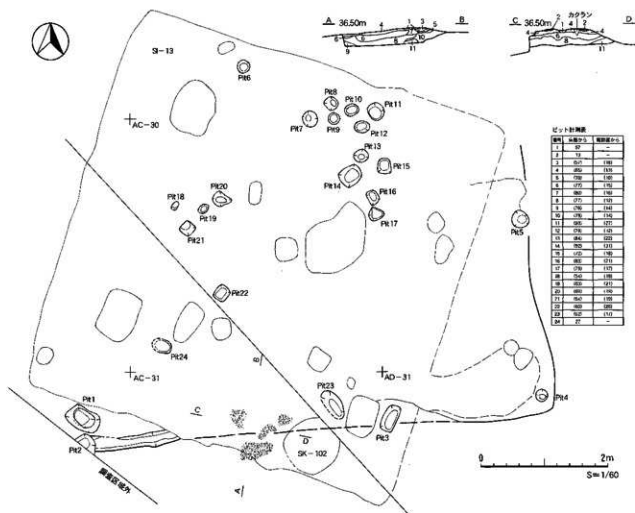
第13号竪穴住居跡 (図9～13)

[位置・確認] AB～AD-29～31グリッドに位置し、標高約36.5mである。平成12・13年度にわたって調査をおこなった。12年度は北半を調査し、第Ⅲ層上面で焼土のひろがりをとらえたが、床面を検出することができず、周溝と掘り方のみを確認した。13年度は残る部分を調査し、第Ⅶ層上面で黒褐色土の方形のプランが確認された。

[重複] 第12号竪穴住居跡、第102号土坑と重複し、本住居跡が古い。外周溝(第158～160号溝跡)が第186号土坑、第109・118・119・125・128号溝跡と重複し、本外周溝が古い。

[平面形・規模] 東壁6.3m、西壁6.2m、南壁6.2m、北壁6.2mで、平面形は方形を呈する。検出面からの壁高は西壁4～14cm、南壁8～20cmで、壁はやや開きながら立ち上がる。推定床面積は36.2㎡である。住居跡の軸方向はN-19°-Eである。

[堆積土] 10層に分層された。ローム・炭化物・焼土が混入する黒褐色土を主体とする。第1層には



ピット計測表

順	北緯	東経
1	12	-
2	12	198
3	12	198
4	12	198
5	12	198
6	12	198
7	12	198
8	12	198
9	12	198
10	12	198
11	12	198
12	12	198
13	12	198
14	12	198
15	12	198
16	12	198
17	12	198
18	12	198
19	12	198
20	12	198
21	12	198
22	12	198
23	12	198
24	12	198

- 第12号竪穴住居跡検出土
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物10%、焼土10%混入
- 第2層 25YR4/8 赤褐色土 焼土層
- 第3層 5YR4/8 赤褐色土 焼土層
- 第4層 10YR2/2 暗褐色土 ローム7%、炭化物7%、焼土7%混入
- 第5層 10YR3/1 黒褐色土 焼土20%混入
- 第6層 10YR3/2 黒褐色土 ローム40%、炭化物2%、焼土1%混入
- 第7層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、ロームブロック2%、炭化物1%、焼土1%混入
- 第8層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物10%、焼土7%、火山灰3%混入
- 第9層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、炭化物1%混入
- 第10層 10YR3/1 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%、焼土1%混入
- 第11層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、ロームブロック3%、炭化物3%、火山灰15%混入



図8 第12号竪穴住居跡

白頭山火山灰がブロック状に堆積する。床面直上では炭化物・焼土が検出され、焼失家屋と考えられる。炭化物・焼土はカマド周辺と南西隅に集中して検出されている。

[床面] 南半のみ検出できた。ほぼ平坦であるが、南西隅がやや高く、斜面下方に15cm傾斜している。床面は黒褐色土と黒色土・暗褐色土の混合土で構築されている。あまり堅く締まっていない。掘り方底面には起伏がみられる。

[カマド] 東壁南側に火床面が残存する。東壁南側から長さ2.0m・幅1.0mの範囲で焼土が東にひろが

っており、これが煙道の痕跡と考えられる。火床面上からは伏せた状態の土師器甕が出土し、周囲からは羽口が2点出土している。支脚に利用されたものと考えられる。

[柱穴] 9基検出された(ピット1～9)。このうち、ピット1～3が主柱穴と考えられる。長軸63～85cmの楕円形・長方形を呈し、床面からの深さは44～69cmである。柱間距離はピット1・2間が3.5m、ピット2・3間が4.2mである。ピット2では長方形の柱痕が確認された。ピット4・7・9は壁際に、ピット5・6は壁からやや内側に位置する。検出面での規模は径20～34cmで、円形・楕円形を呈する。床面からの深さは9～56cmである。

[周溝] 幅9～28cm、深さ3～16cmの周溝が南壁・西壁直下を巡る。床構築土を取り除いたところ、西壁の40～50cm内側に、幅20～30cm、深さ2～10cmの周溝が検出され、南側でも床面で周溝のプランが確認されたことから、拡張前の住居跡と考えられる。

[ピット] 29基検出された(ピット10～38)。このうちピット12～19・38は焼土の下で検出されたもので、本住居跡に伴うと考えられる。ただし、ピット18・19はカマドの煙道部と考えられる位置で検出されており、本住居構築以前のピットの可能性もある。ピット10・11は床下で検出され、拡張前の住居跡に伴うと考えられる。これ以外のピット20～37は本住居跡・第12号住居跡のどちらに伴うかは不明である。

[外周溝] 本住居跡に付属すると考えられる外周溝は第158～160・162号溝跡で、形を変えながら少なくとも3回のつくりかえが認められる。本報告書では、新しいものから外周溝1(第160号溝跡)→外周溝2(第159号溝跡)→外周溝3(第158号溝跡)→外周溝4(第162号溝跡)とした。これらの外周溝は、第186号土坑・第109・118・119・125・128号溝跡と重複し、外周溝が最も古い。外周溝1とした第160号溝跡部分については調査時に一部第7号竪穴住居跡・第141号溝跡の名称を使用した。第159号溝跡については、土層観察をおこなった3ヶ所のセクションで新旧関係が認められ、古い方を第161号溝跡として調査をおこなった。第161号溝跡はほぼ同一の溝跡の掘り直しと考えられるものの、すべての溝跡を同時に掘り進めたため、平面的に追うことができず、第159号溝跡として名称を統一した。また、調査区際から伸びる第110～112号溝跡は整理作業の段階で、堆積土の状況や新旧関係、火山灰の種類・有無によって第158～160・162号溝と対応させることが可能と考え、これらを欠番とし、第110号溝跡を第158・159号溝跡、第111号溝跡を第162号溝跡、第112号溝跡を第160号溝跡として報告することとした。外周溝1～4の形態については、狭めたり拡張したりして複雑に重複しているため、土層観察ベルトを基に平面図を推定せざるを得ない部分があったが、南側の壁際の土層を記録していなかったことからその部分の個々の溝跡の平面は推定不可能であった。以下に、それぞれの外周溝について述べる。

外周溝1(第160号溝跡)

他の外周溝より浅いつくりのため、溝跡の平面形は掘り下げによりほとんど失われている。白頭山火山灰の堆積状況から、第13号竪穴住居跡の最終段階に付属すると考えられる。住居跡の南～西～北側をC字状に囲む形で、開口部北側の末端は住居跡の東西軸とほぼ一致する東方向へ屈曲している。溝底面の高さは南側の末端部が最も高く、北側の末端部に向かって傾斜しており、その比高差は130cmにもなる。確認できる部分での溝幅は48～84cm、深さ6～22cmが一般的である。北側末端部分で幅140cm、深さ36cmに拡張し、先端は幅40cmに先細りし、階段状に立ち上がる。拡張した末

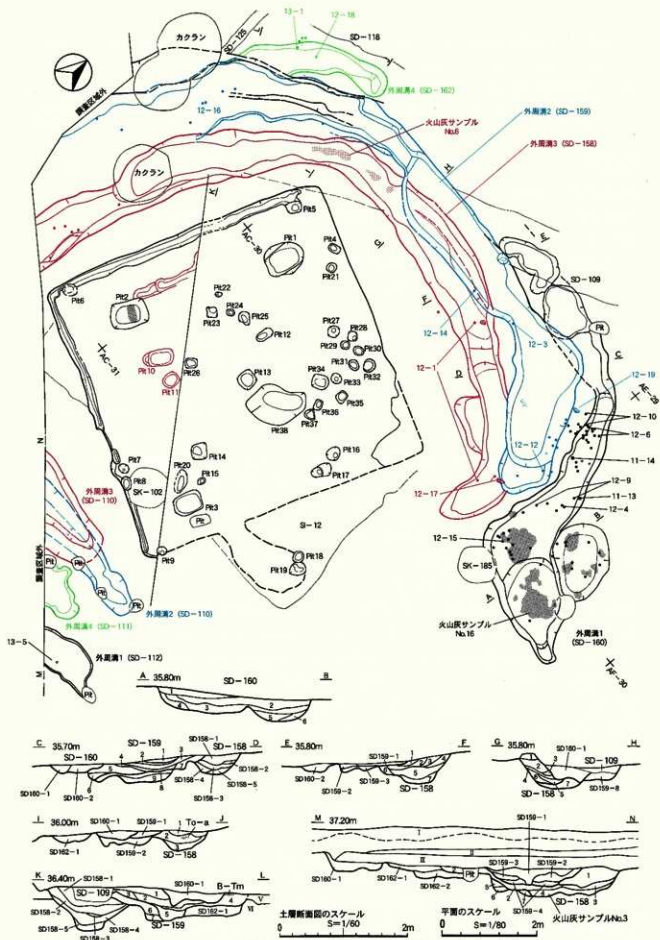


図9 第13号竈穴住居跡(1)

第13号竪穴住居跡外周溝1 (第160号溝跡) 堆積土
(A-B)

- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 白頭山火山灰12%, ロームブロック5%
ローム3%, 炭化物3%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 白頭山火山灰10%, ロームブロック1%, 炭化物・糞土3%混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3%, 糞土2%, 炭化物1%混入
第4層 10YR3/4 暗褐色土 10YR2/3 黒褐色土との混合土 ロームブロック15%混入
第5層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック1%, 糞土1%, 炭化物1%混入
第6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3%混入
(C-D・E-F・I-J・K-L)

第1層 10YR2/1 黒褐色土 ローム7%混入

第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体、黒褐色土30%混入

(G-H)

第1層 10YR3/1 黒褐色土 ローム10%, 堅くしまる

(M-N)

第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3%, 炭化物2%, 糞土1%混入

第13号竪穴住居跡外周溝2 (第159号溝跡) 堆積土

(C-D・E-F・G-H)

第1層 10YR5/1 黒褐色土と小ロームブロックとの混合土 堅くしまる

第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%混入

第3層 10YR3/1 黒褐色土 ローム12%混入

第4層 10YR2/1 黒褐色土 ローム5%混入

第5層 10YR3/1 黒褐色土 ローム5%混入

第6層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%混入

第7層 10YR2/3 黒褐色土と小ロームブロックとの混合土

第8層 10YR5/6 黄褐色土 黒褐色土40%混入, 堅くしまる

第9層 10YR3/1 黒褐色土 ローム7%混入, 緻密

(I-J)

第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%混入

第2層 10YR2/2 黒褐色土 小ロームブロック30%混入, しまりありなし

(K-L)

第1層 10YR2/2 暗褐色土 ローム25%混入, しまりあり

第2層 10YR2/1 黒褐色土 ローム10%混入

第3層 10YR3/2 暗褐色土 ローム3%混入

第4層 10YR2/1 黒褐色土 ローム3%混入

第5層 10YR2/2 暗褐色土 小ロームブロック・ローム5%混入, 粘性あり

第6層 10YR3/2 暗褐色土 ローム10%, 炭化物・糞土3%混入

第7層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック主体, 堅くしまる

(M-N)

第1層 10YR2/2 暗褐色土 ローム・炭化物10%混入

第2層 10YR3/3 暗褐色土とロームブロックとの混合土 炭化物5%混入

第3層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック主体, ローム10%, 黒褐色土3%, 炭化物・糞土1%混入

第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・炭化物2%, 糞土1%混入

第13号竪穴住居跡外周溝3 (第159号溝跡) 堆積土

(C-D)

第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%混入

第2層 10YR4/3 暗褐色土と小ロームブロックとの混合土

第3層 10YR2/3 暗褐色土 緻密

第4層 10YR2/2 暗褐色土 ローム12%混入

第5層 10YR3/1 暗褐色土 ローム20%混入

(E-F)

第1層 10YR3/1 暗褐色土 ローム15%, 糞土5%混入

第2層 10YR3/2 暗褐色土 小ロームブロック10%混入

第3層 10YR2/3 暗褐色土 ローム7%混入

第4層 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土と小ロームブロックとの混合土

第5層 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土と小ロームブロックとの混合土

第6層 10YR2/3 暗褐色土 ローム3%混入

第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム12%混入, 粘性・しまりあり

(G-H)

第1層 10YR4/6 褐色土 黒褐色土40%混入, しまりあり

第2層 10YR2/2 暗褐色土 ローム20%混入

第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7%混入

第4層 10YR2/3 暗褐色土と小ロームブロックとの混合土

第5層 10YR3/1 暗褐色土 ローム7%混入

第6層 10YR2/2 暗褐色土

第7層 10YR3/3 暗褐色土と小ロームブロックとの混合土 堅くしまる

(I-J)

第1層 10YR3/1 暗褐色土とロームブロックとの混合土

第2層 10YR1/7 褐色土 白頭山火山灰をレンガ状に混入, 緻密

第3層 10YR2/2 暗褐色土 ローム3%混入, 緻密

(K-L)

第1層 10YR2/2 暗褐色土 小ロームブロック30%, 糞土5%混入

第2層 10YR2/2 暗褐色土とロームブロックとの混合土

第3層 10YR3/3 暗褐色土 砂土

第4層 10YR2/1 暗褐色土 ローム5%混入, 粘性あり

第5層 10YR4/3 暗褐色土と粘土ブロックとの混合土 堅くしまる

(M-N)

第1層 10YR3/4 暗褐色土とロームとの混合土 黒褐色土7%, 炭化物1%混入

第2層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物3%, 糞土2%, 砂土下層に十和田a火山灰5%混入

第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%, 炭化物2%混入

第4層 10YR2/3 暗褐色土 ローム3%, 炭化物2%, 黒褐色土1%混入

第5層 10YR4/6 褐色土 黒褐色土20%, 炭化物2%混入

第6層 10YR2/3 暗褐色土 十和田a火山灰7%, ローム3%, 炭化物2%, 黒褐色土1%混入

第7層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土7%, ローム・糞土3%, 炭化物2%混入

第13号竪穴住居跡外周溝4 (第162号溝跡) 堆積土

(I-J)

第1層 10YR3/1 暗褐色土 しまりありなし

(K-L)

第1層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体, 暗褐色土40%混入, 堅くしまる

(M-N)

第1層 10YR2/2 暗褐色土 ローム3%, 炭化物・糞土1%混入

第2層 10YR4/6 褐色土 暗褐色土30%, 糞土・炭化物1%混入

端部の北側には166×120cm、深さ30cmの楕円形の土坑が連結しており、堆積土の状況から外周溝と同時に機能していたと考えられる。外周溝の堆積土は黒色土を主体とする自然堆積の様相を示し、壁や底面にロームと黒褐色土の混合土を貼り付けている。両側の末端部分の堆積土は黒褐色土を主体とし、北側末端部分の確認面には白頭山火山灰が堆積している。また、堆積土上位からは80×60cmの不整楕円形の焼土範囲、その下位からは土器や石器が出土し、使われなくなった外周溝に人為的に廃棄したものと考えられる。

外周溝2 (第159号溝跡)

外周溝1の内側に位置する。第13号竪穴住居跡拡張後の段階に付属すると考えられ、住居跡の南～西～北側をC字状に囲む形で、北側の末端部は130°の角度で南東方向へ向かって屈曲している。溝底面の高さは南側の末端部付近で最も高く、北側へ向かって傾斜し、北側末端部の屈曲部分で最も低い。比高差は110cmである。溝幅は80～124cm、深さ7～45cmで、北側末端部の先端は階段状に立ち上がる。溝跡の断面形状は、丸みをもった底面からほぼ垂直に上昇し、屈曲して開きながら立ち上がる形が一般的である。堆積土の観察からは、C-Dセクションの第1～7層と第8・9層間、I-Jセクションの第1層と2層間、K-Lセクションの第1～5層と第6・7層間の3箇所で見積りが認められ、ほぼ同じ場所もしくはわずかにずらして掘り直された痕跡と考えられる。新段階の第159号溝跡は黒褐色土を主体として黒色土や暗褐色土が堆積し、自然堆積の様相を呈するが、C-Dセクションの第1層では堅くしまったロームブロックとの混合土が堆積する。K-Lセクションでは自然堆積の黒色土中に白頭山火山灰が少量混入する。古段階の第161号溝跡は第159号溝構築時にロームブロックと黒褐色土の混合土で埋められている。

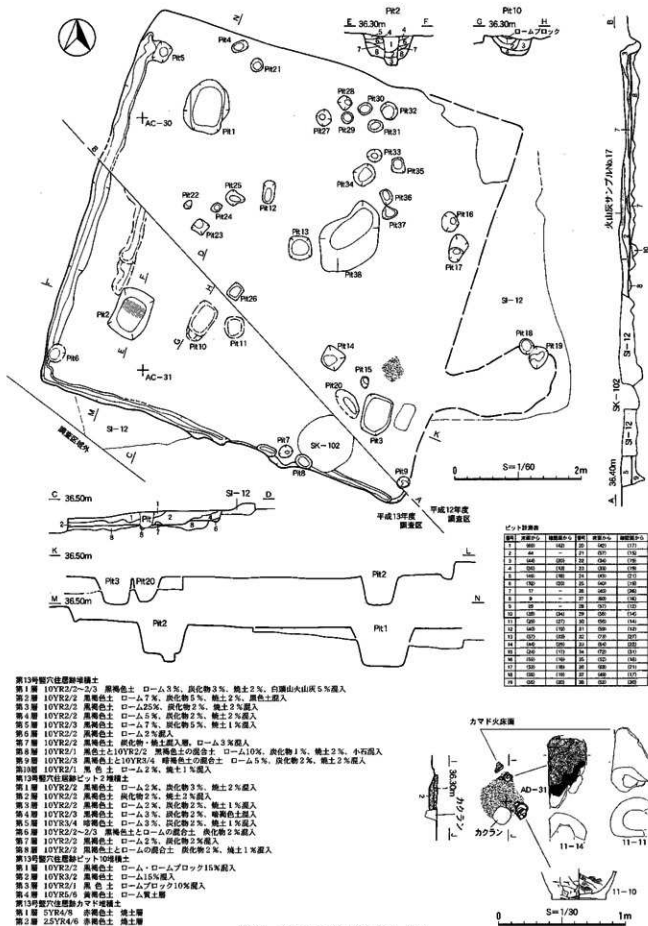


図10 第13号竪穴住居跡 (2)

外周溝3（第158号溝跡）

外周溝2の内側に位置する。南・西・北側ともほぼ住居跡壁面に平行でコの字状を呈し、北側の末端部分のみ東壁に沿って屈曲する。第13号竪穴住居跡の北西端と溝跡との距離が約40cmと狭すぎるため、外周溝3は第13号竪穴住居跡の拡張前の段階に付属すると考えられる。溝底面の高さは南側の末端が最も高く、北側へ向かって傾斜し、北側にある橋状の高まりの前後で最も低くなり、比高差は90cmを測る。北側の末端は緩やかに上昇しており、最も低い地点との比高差は30cmである。溝跡の断面形は、外周溝2と同様丸みをもつ底面から垂直に上昇し、屈曲して開きながら立ち上がる形で、幅46～114cm、深さ12～70cmを測り、深くしっかりしたつくりである。堆積土はG-H・I-J・K-L・M-Nセクションで黒色土と黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す下半層と、ロームブロックと黒褐色土の混合土を主体とする人為堆積の様相を示す上半層に分かれ、自然堆積する黒色土～黒褐色土中に十和田a火山灰を中量混入する。C-D・E-Fセクションでは人為的に埋め戻された様子はみられない。

外周溝4（第162号溝跡）

複雑に重複するため、両末端部分を確認できたのみである。住居跡の南側と西側をL字状に囲む形で、住居跡壁面からやや離れるものの、本溝跡も第13号竪穴住居跡拡張前の段階に付属すると考えられる。溝底面は南側の末端部分で最も高く、北へ向かって傾斜すると考えられ、北側の末端近くで最も低くなり、その比高差は72cmを測る。確認できる幅は28～100cm、深さは2～26cmで、底面の平坦な広い溝であったと推定される。ロームブロックと暗褐色土の混合土による人為堆積層が自然堆積層を挟まずに堆積し、埋め戻されていることから、機能していたのはごく短期間であったと推定される。

〔出土遺物〕カマド火床面上から出土した破片から土師器坏1点・甕2点を復元図示した。図11-8の底面には板目痕が残る。遺物は外周溝出土のものが多く、土師器甕は他の遺構に比べて、ロクロ使用のもの割合が多い。図12-4は土師器広口壺で、器形や口縁断面など須恵器をかなり意識したつくりである。図12-7は口縁から胴部下半まで残存する甕であるが、内外面ともケズリヤナデなどの再調整はみられない。図12-9～11はロクロ使用の甕の底部で、いずれも底径約6.5cmと小ぶりで、外面にはケズリヤナデの再調整が入るが、内面は再調整がみられず、ロクロの痕跡が残る。9と10の底面には糸切痕がみられる。図12-17・19は厚手の須恵器坏で、胎土分析では2点とも産地不明との結果が得られた（第3章第3節）。図13-2は凝灰岩、13-4は流紋岩製の砥石片でそれぞれ少しずつ角度を変えながら使用されている。4条の外周溝は、火山灰によって、それぞれの時期がほぼ特定できるが、出土遺物のみを限り、時間差による際立った差異はみとめられない。

〔小結〕本住居跡は4本の主柱穴と壁際に柱穴をもつ構造である。外周溝3に十和田a火山灰が混入し、住居跡堆積土第1層と外周溝1堆積土に白頭山火山灰がみられることから、本住居跡は十和田a火山灰降下以前に構築され、白頭山火山灰降下前に廃棄されたと考えられ、時期はほぼ10世紀前半と考えられる。

（田中、水谷）

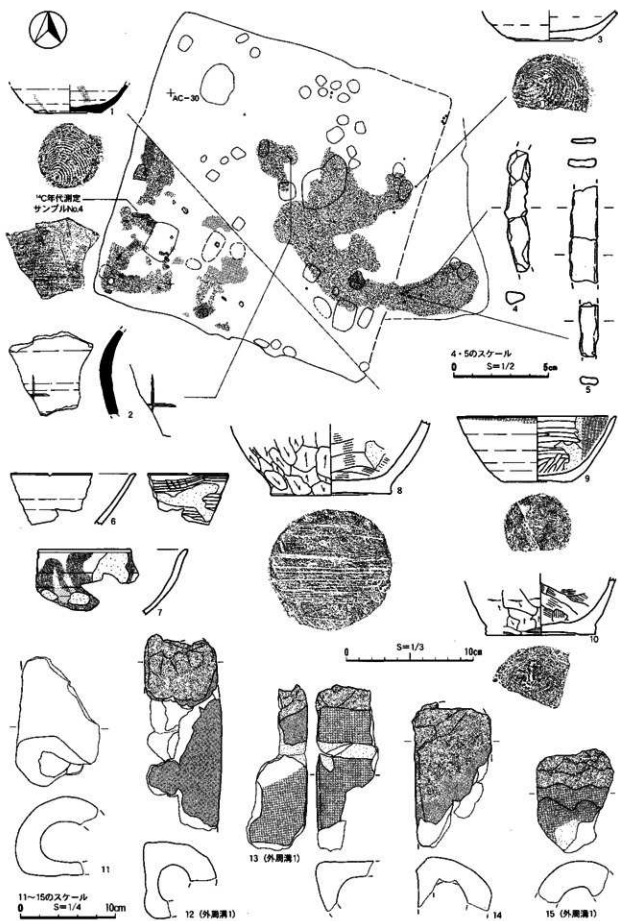


図11 第13号竪穴住居跡 (3)

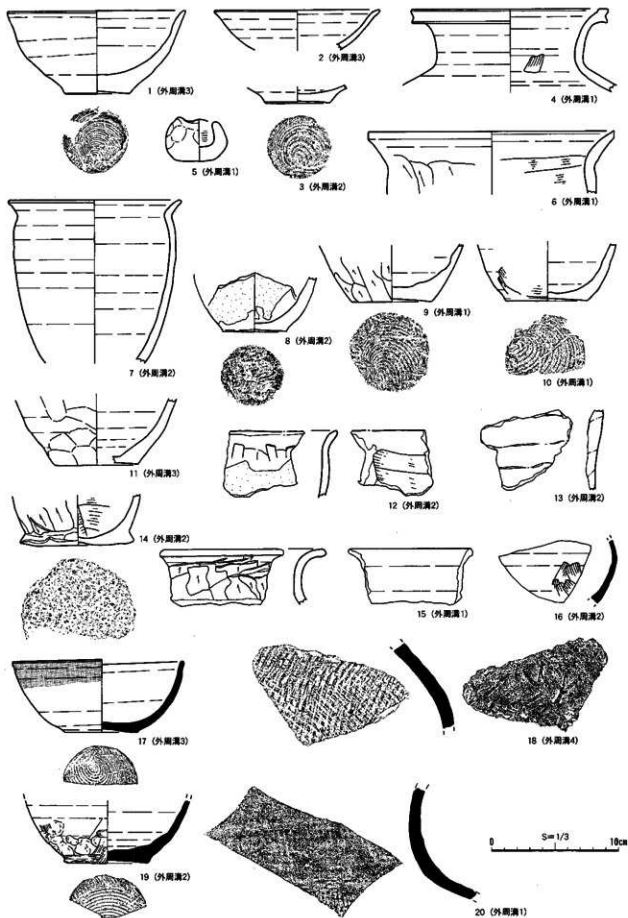


図12 第13号竪穴住居跡 (4)

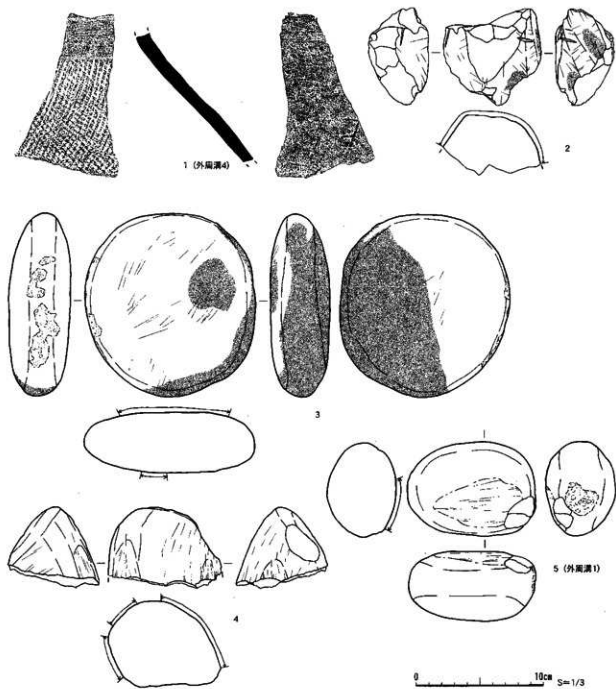


图13 第13号竖穴住居跡(5)

第103号竪穴住居跡（図14・15）

〔位置・確認〕 AU・AV-36・37グリッドに位置し、標高約32mである。第Ⅷ層上面で確認された。南半は道路の下に延びるため、道路付け替え後に調査をおこなったが、中央部は調査できなかった。

〔重複〕 第126号竪穴住居跡外周溝、第119・176・187号土坑、第101号井戸跡と重複し、第176号土坑との新旧関係は不明であるが、第126号住居跡より新しく、他の遺構よりは古い。外周溝(第113号溝跡)は第107・126号竪穴住居跡外周溝と重複し、第126号住居跡外周溝より新しく、第107号住居跡外周溝より古い。

〔平面形・規模〕 西壁6.5mで、東壁・南壁・北壁は一部が検出されたのみである。平面形は方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は東壁0cm、西壁18～38cm、南壁7～42cm、北壁0～16cmで、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。推定床面積は30.8㎡である。住居跡の軸方向はN-17°-Eである。

〔堆積土〕 24層に分層された。ローム・炭化物・焼土が混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。

〔床面〕 床面には緩やかな起伏がみられ、東に約15cm傾斜している。にぶい黄褐色ローム(第15層)で構築されているが、北東部ではロームが混入する黒色土(第12層)が貼られていた。北東部分だけ床面をつくり直したと考えられる。にぶい黄褐色ロームを除去したところ、ロームが混入する黒褐色土の硬化面(第17層)が検出された。硬化面範囲は東壁より1.8～2.0m・北壁より60～80cm内側で、東西は4.0mである(3枚目の床面範囲)。硬化面上面はやや起伏があり、東に約10cm傾斜している。掘り方底面には緩やかな起伏があり、斜面下方の東側は深く掘り込まれている。

〔カマド〕 検出されなかった。調査できなかった東壁南側に構築されていたと考えられる。

〔柱穴〕 6基検出された(ピット8～13)。ピット12は南西隅に、ほかは周溝内に位置する。柱穴はすべて楕円形を呈し、長軸25～48cm・短軸10～22cm・周溝底面からの深さ2～20cm・床面からの深さ12～28cmである。

〔周溝〕 幅19～61cm、深さ1～17cmの周溝がほぼ一巡する。また、床面ほぼ中央に北壁とほぼ平行する溝が2条検出された(住居内溝1・2)。住居内溝1は長さ2.1m・幅9～20cmで、ほぼ直線状である。深さ1～7cmで、底面はほぼ平坦である。住居内溝2は長さ3.0m・幅14～26cmで、やや湾曲する。深さ5～11cmで、底面は東側に傾斜している。これらの溝からは南北に直交する溝が分岐している。このほかにも1条検出されているが、調査不能区域にのびるため詳細は不明である。間仕切り溝の可能性も考えられるが、用途は不明である。

〔ピット〕 7基検出された(ピット1～7)。北東隅に位置するピット1は径50cmの円形を呈し、深さ19cmである。堆積土には焼土が多量に混入し、土師器片が約20点出土した。焼土と遺物は廃棄と考えられる。ピット2は中央西側に位置し、長軸215cm・深さ41cmの不整楕円形を呈する。底面から10cm上まで炭化物および炭化物混入土が堆積し、これ以外の堆積土にもローム・粘土ブロックが多量に混入し、最上層に焼土が堆積している。ピット3堆積土中位に焼土、ピット4底面に炭化物が堆積していた。

〔外周溝〕 第113号溝跡が外周溝と考えられる。住居の南側から西側・北側をコの字状に巡り、調査区外にのびる。住居から1.2～2.0m離れて構築され、幅30～72cm、深さ5～38cmである。断面形はV

第103号竪穴住居跡出土品

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック15%、炭化物2%、焼土1%混入
- 第2層 10YR3/1 黒褐色土 ローム10%、炭化物1%、焼土1%混入
- 第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%、焼土2%混入
- 第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%混入
- 第5層 10YR3/1 黒褐色土 ローム15%混入
- 第6層 10YR3/1 黒褐色土とロームブロックの混合土
- 第7層 10YR3/1 黒褐色土とローム15%混入
- 第8層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物2%、焼土20%混入
- 第9層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物2%、焼土1%混入
- 第10層 10YR2/1 黒色土 ローム1%、焼土2%混入
- 第11層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物3%混入
- 第12層 10YR2/1 黒色土 ローム2%、焼土1%混入
- 第13層 10YR3/1 黒褐色土 ローム3%混入
- 第14層 10YR3/1 黒褐色土 ローム3%、炭化物1%混入
- 第15層 10YR5/4 灰色土 ローム、焼土3%混入
- 第16層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入
- 第17層 10YR2/2 黒褐色土 ローム25%混入
- 第18層 10YR2/1 黒色土 ローム3%、粘土ブロック15%、黒褐色土15%混入
- 第19層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2%、黒褐色土1%混入
- 第20層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、炭化物1%混入
- 第21層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック5%、炭化物1%、焼土1%、黒色土1%混入
- 第22層 10YR3/3 暗褐色土 ローム20%、焼土1%混入
- 第23層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%混入
- 第24層 10YR2/3 黒褐色土

第103号竪穴住居跡外周溝 (第113号溝跡) 埋積土

- (I-J)
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物1%、焼土1%混入
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10%、炭化物2%、焼土1%混入
 - 第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7%混入
 - 第5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7%、ロームブロック30%混入
 - 第6層 10YR4/3 灰色土 ローム40%、ロームブロック20%混入
 - 第7層 10YR2/3 黒褐色土と10YR3/3 暗褐色土の混合土
- (K-L)
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、焼土1%混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム15%混入
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10%、炭化物2%、焼土1%混入
- (M-N)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%混入
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム15%混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%、炭化物1%混入
 - 第4層 10YR2/3 暗褐色土
 - 第5層 10YR2/3 暗褐色土 焼土1%混入

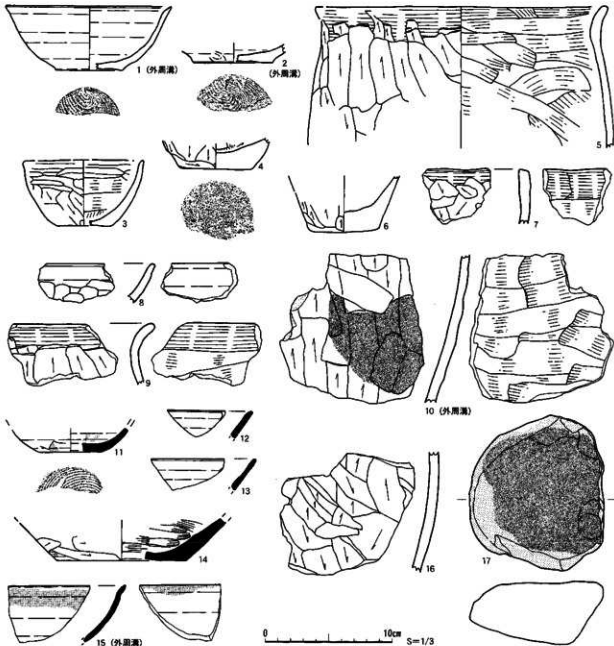


図15 第103号竪穴住居跡 (2)

字状～逆台形状を呈する。堆積土は黒褐色土を主体とし、人為堆積の可能性がある。

【出土遺物】住居跡から、床面から土師器甕12点、堆積土から土師器杯11点・甕47点・製塩土器1点、須恵器杯4点・壺8点・大甕4点、礫1点、ビット堆積土から土師器杯1点・甕21点、鉄滓1点が出土している。外周溝底面から土師器甕1点、堆積土から土師器杯5点・甕24点、須恵器杯1点、鉄滓1点が出土している。図15-3はロクロ不使用の土師器杯である。外面ケズリ・内面ナデで、口縁部には横方向のミガキが施される。口径9.8cm・底径(4.2)cmで、ロクロ使用の杯にくらべ、小ぶりである。図15-8はロクロ使用の杯であるが、胴部外面にはケズリがみられる。図15-17は外面が被熱し、炭化物が付着する礫である。

【結】周溝と壁際の柱穴を有する構造で、平面形コの字状の外周溝が伴う。床面が3枚検出されており、床面の作り替えのみをおこなったと考えられる。時期は明確ではないが、第107・126号住居跡との重複を考慮すると、10世紀中葉あたりと推測される。(田中)

第104号竪穴住居跡(図16・17)

【位置・確認】AP～AR-31・32グリッドに位置し、標高約33mである。第Ⅶ層上面で床面を検出した。北東半は調査区外にのび、調査できなかった。

【重複】第123・142号溝跡と重複し、本住居跡が古い。外周溝(第157号溝跡)が第135・150号溝跡と重複し、本外周溝が新しい。

【平面形・規模】検出長は西壁4.3m、南壁5.6mで、平面形はやや歪な方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は西壁1～17cm、南壁1～9cmで、壁は緩やかに立ち上がる。また、各壁の25～60cm内側に周溝が検出され、土層断面の観察から外側の周溝を埋めて内側に作り直したと考えられる。検出長は西壁3.7m、南壁4.5mである。改築は住居跡の軸方向をほとんど変えずにおこなわれ、改築前がN-5°-E、改築後がN-6°-Eである。

【堆積土】19層に分層された。ローム・炭化物が混入する黒褐色土を主体とする。

【床面】黄褐色土で構築され、中央部がやや高い。

【カマド】検出されなかった。

【柱穴】5基検出された(ビット1～5)。いずれも南壁周溝内に位置する。径28～44cmの円形及び楕円形で、周溝底面からの深さは5～14cm、床面からの深さは15～27cmである。

【周溝】幅11～36cm、深さ2～46cmの周溝が壁直下を一巡する。周溝底面は起伏が大きく、南西隅に向かって深くなる。内側の周溝は幅14～31cm・深さ4～22cmで、底面は起伏が大きい。

【ビット】6基検出された(ビット6～11)。径18～35cmの楕円形で、深さは6～37cmである。

【外周溝】第157号溝跡が外周溝と考えられる。住居南側から西側にかけて構築され、調査区外にのびる。北側は第135・150号溝跡との重複により平面的にとらえることができなかったが、調査区際の土層断面で確認できた。住居からは2.0～2.4m離れている。幅21～62cm、深さ7～36cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土はロームが混入する黒褐色土を主体とする。外周溝南端で土師器杯・皿・甕が4点まとまって出土している。

【出土遺物】住居跡から、床面から土師器杯1点・甕3点、須恵器壺2点・大甕1点、堆積土から土師器杯1点・甕13点、須恵器壺2点・大甕1点、礫石器1点、木構築土から須恵器壺1点・大甕1点が

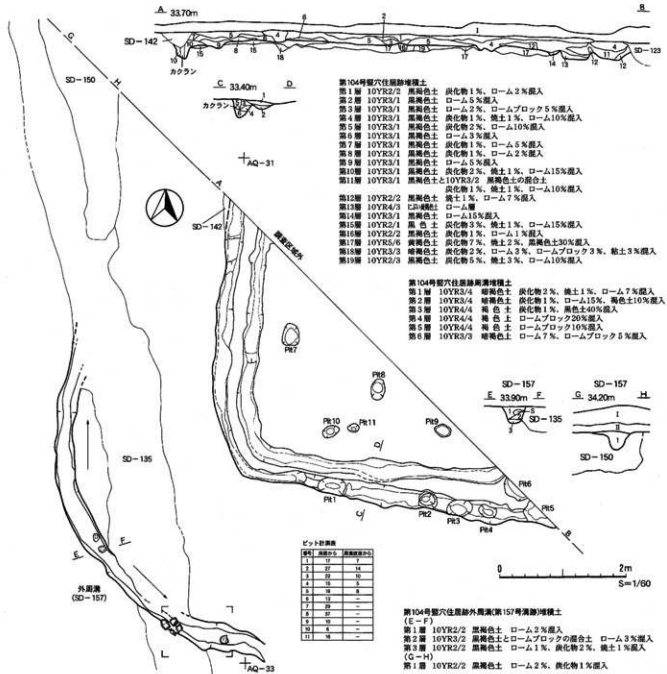


図16 第104号竪穴住居跡 (1)

出土している。外周溝堆積土から土師器環3点・皿1点・甕14点が出土している。図17-1~4は外周溝堆積土からまとまって出土したものである。1の土師器甕は頸部が短く、口縁付近までケズリがみられる。2の土師器皿には歪みがあり、口縁が楕円形で、外面には煤状炭化物が付着している。図17-6はロクロのみで内外面とも再調整がみられない土師器環で、口縁に歪みがみられる。口縁部断面は先細りする。胴部中央に「上」の墨書がみとめられる。

[小結] 検出できたのは一角であるが、柱穴が周溝内に不規則に並ぶ構造と推測され、外周溝が伴う。時期は明確ではないが、9~10世紀と考えられる。

(田中)

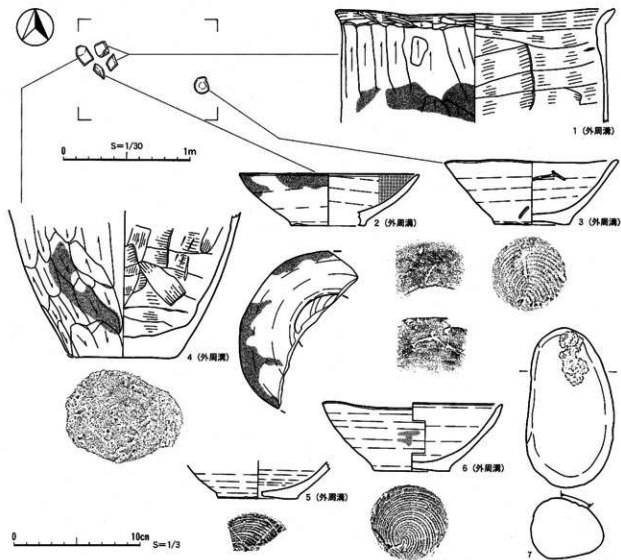


図17 第104号竪穴住居跡 (2)

第105号竪穴住居跡 (図18)

[位置・確認] AC-26・27グリッドに位置する。標高約35.5mの平坦地に位置する。第V～VII層上面で確認された。整地による削平を受けており、南西側約半分程度の床面と壁らしき段差を確認した程度である。

[平面形・規模] 残存する南東壁は2.2m、南西壁はビット5をコーナーと考えると3.4mを測るが、段差は更に北西方向に伸び、その長さを含めると3.9mである。平面形は不明であるが、ビット6～10が壁際に並ぶ柱穴と考えると、南北壁の規模は約4mとなり、南北壁の長い長方形となる。壁高は南東壁2～14cm、南西壁8cmでやや開きながら立ち上がる。残存する床面積は5.2㎡、軸方向はN-23°-Wで、柱穴配置から推定される床面積は約12㎡である。

[堆積土] 8層に分層された。北東側の堆積土が残されていないが、黒褐色土を主体とする。

[床面] 南西側半分のみ検出した。南西側隅が最も高く、北及び東に向かって10cm程度低くなる。床面は第V～VII層まで掘り込み、ロームブロックを混ぜた黒褐色土を掘り方の埋土とし、その上面を床

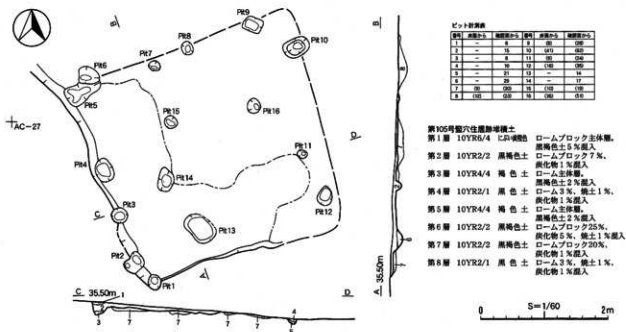


図18 第105号竪穴住居跡

面としているが、あまり堅さは感じられない。

【柱穴】柱穴とみられるピットは10基検出された（ピット1～10）。このうち、ピット1～6は壁際の柱穴である。20～32cmの円形または長方形で、コーナーに位置するピット5のみ58×34cmの長方形を呈する。深さはピット1～4は8～15cmと浅く、ピット5・6は20cm以上の深さがある。ピット7～10も壁際の柱穴の可能性がある。ピット7～9は16～28cmまでの楕円形または長方形で、確認面からの深さは8～12cmと浅い。ピット10はピット5と位置的に対応しないが、40×30cmの長方形で、確認面からの深さは41cmを測る。これらのピットの柱間距離は50～130cmとバラツキがある。

【ピット】6基検出された（ピット11～16）。平面形態・深さとも不揃いで、配置にも規則的なものはみとめられない。

【出土遺物】出土遺物は土師器甕片が床面上から1点、堆積土中から2点出土したのみである。小片のため、図示するには至らなかった。

【小結】本住居跡の年代は平安時代と考えられる。

(水谷)

第107号竪穴住居跡 (図19～22)

位置・確認 AR～AT-33～35グリッドに位置し、標高約33mである。第Ⅶ層上面で黒褐色土の方形のプランとして確認した。北東隅は調査区外にのび、東側は削平により検出されなかった。西壁・南壁では周溝が二重に検出され、南西方向への拡張がみとめられる。新しい住居跡を第107Ⅰ号、古い住居跡を第107Ⅱ号とし、以下に述べる。

重複 住居跡及び外周溝(第124a・145号溝跡)が第108・111号竪穴住居跡、第122・128～131号土坑、第123・164・147号溝跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また、外周溝1は第103・111Ⅰ号竪穴住居跡外周溝と重複し、本住居跡に伴う外周溝が新しい。

第107Ⅰ号竪穴住居跡

[平面形・規模] 西壁と南壁・北壁の一部が検出された。西壁7.6mで、平面形は方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は西壁9～33cm、南壁0～22cm、北壁6～22cmで、壁はやや開きながら立ち上がる。住居跡の軸方向はN-0°-Eである。

[堆積土] 26層に分層され、黒褐色土を主体とする。壁と周溝の間を埋めるように粘土が検出された。

[床面] 第107Ⅱ号住居跡の床面を継続して使用したと考えられる。緩やかな起伏があるがほぼ平坦で、東に約15cm傾斜している。黒褐色土とロームで構築されている。南東側では粘土を貼って床面としている。

[カマド] 前段階のカマドを継続して使用したと考えられ、東壁南側に火床面と考えられる焼土が検出された。焼土は115×70cmの不整形の範囲にひろがり、深さ4cmまで被熱により赤変している。

[柱穴] 9基検出され(ビット2～10)、このうち、ビット2～5が支柱穴と考えられる。それぞれ壁から1.5～1.7m内側に位置する。長軸32～44cmのほぼ同規模の楕円形・隅丸長方形であるが、深さは46～98cmとバラツキがある。柱間距離はビット2・3間が5.4m、ビット3・4間が5.4m、ビット4・5間が5.2m、ビット3・5間が5.3mで、ほぼ一定である。このほか、ビット8・10は住居隅、ビット6・7・9は周溝内に位置する。ビット6は周溝内に位置するが外傾しており、本住居跡に伴わない可能性も考えられる。

[周溝] 幅11～50cm、深さ6～25cmの周溝が一巡すると考えられる。周溝は南壁では壁直下を巡るが、西壁と北壁では壁から離れている。壁と周溝の間隔は北壁では5～10cmとほぼ一定であるのに対し、西壁では南西隅で10cm、北西隅では50cmで、周溝は住居の西壁に対して東に傾き、第107Ⅱ号住居跡の周溝にほぼ平行である。

[ビット] 平面図に示したほかに小規模なビットが多数確認されたが、第131号土坑・164号溝跡と重複する位置にあり、明確な掘り方は検出できなかった。

[土坑] 西側中央部に1基検出された(ビット1)。100×90cmの隅丸方形を呈する。断面形は逆台形状で、深さは32cmを測る。堆積土にはロームと粘土が多量に混入し、埋め戻されたと考えられる。

[外周溝] 第124a・145号溝跡が本住居跡に伴う外周溝と考えられる。新しい第124a号溝跡を外周溝1、古い第145号溝跡を外周溝2とする。外周溝1は住居の南側から西側・北側をコの字状に巡る。外周溝1は住居から1.0～2.0m離れて構築され、幅37～90cm、深さ8～53cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土はローム・粘土・炭化物が混入する黒褐色土を主体とし、一部埋め戻し後の自然埋没と考えられる。外周溝2は住居南西側でのみ検出された。幅28～45cm、深さ8～46cmで、断

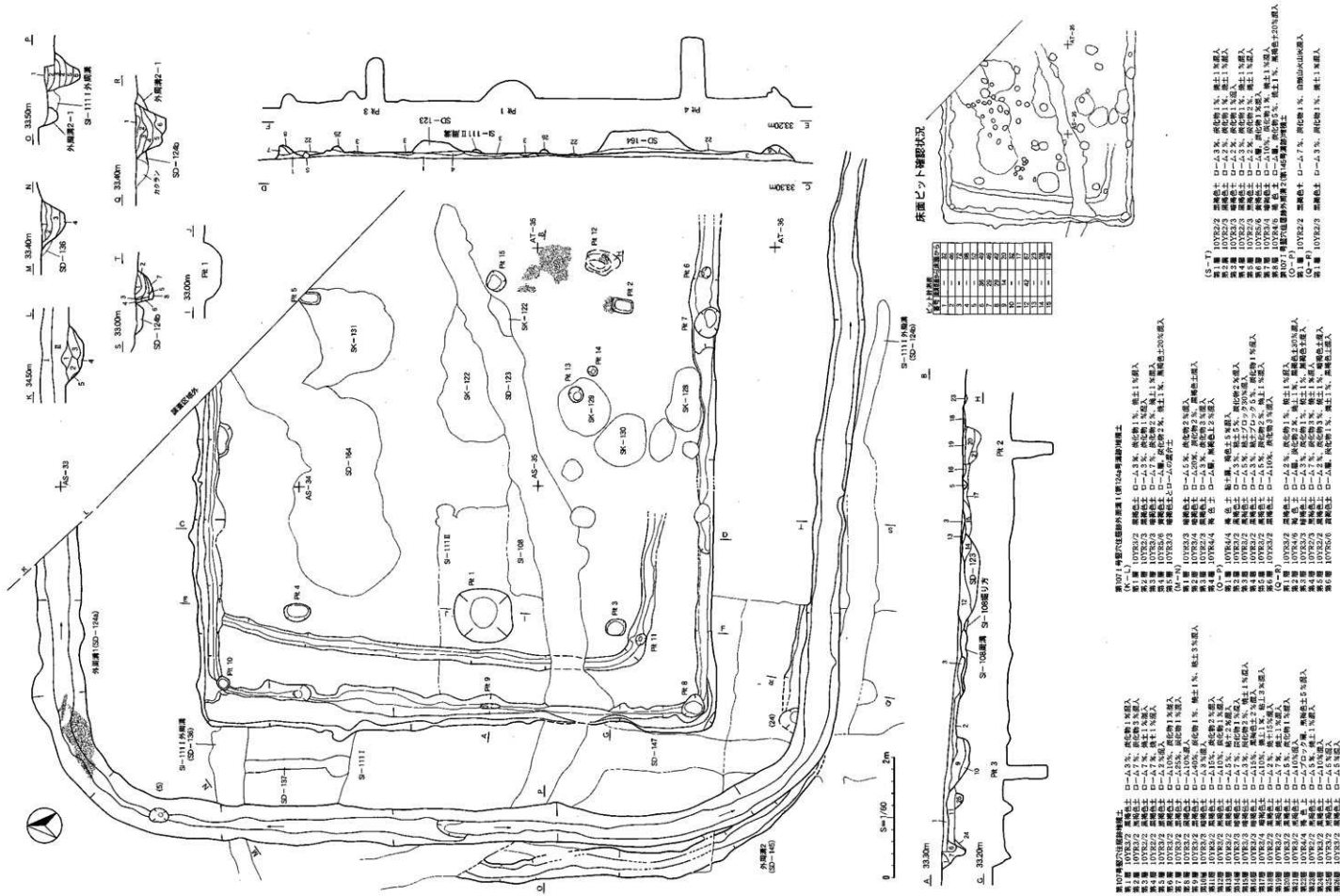


図19 第107号竪穴住居跡 (1)

面形はU字状を呈する。西側では外周溝1の外側を巡り、南西隅で交差し、南側では内側を巡る。北端は第123号溝跡と接続する。第123号溝跡絶後、本住居が構築されているが、その際に第123号溝跡の北側を利用し、南側を延長した可能性も考えられる。2条の外周溝は第107Ⅱ号住居跡とは軸方向があわず、住居拡張時に構築されたと考えられるが、第123号溝跡からの継続性を考えると、外周溝2が第107Ⅱ号住居跡に伴う可能性も否定できない。

第107Ⅱ号竪穴住居跡

[平面形・規模] 西壁と南壁・北壁の一部が検出された。西壁7.6mで、平面形は方形を呈すると考えられる。住居跡の軸方向はN-5°-Eである。

[堆積土] 検出されなかった。

[床面・カマド] 拡張後も継続して使用されたと考えられる。

[柱穴] 床下から検出されたビット12が主柱穴の1つと考えられるが、ほかに対応する柱穴は検出されなかった。第107Ⅰ号住居跡のビット3・4を使用した可能性も考えられるが、ビットのそれぞれの壁からの距離がかなり異なるため、ビット12に対応する主柱穴とは断定し難い。

[周溝] 幅17~32cm、深さ6~15cmの周溝が東壁を除いて検出された。第107Ⅰ号住居跡の周溝の50~90cm内側を巡る。

[ビット] 本住居跡に伴うものか第107Ⅰ号住居跡に伴うものかの判断はできない。

出土遺物 住居跡床面から土師器甕4点、須恵器壺1点・大甕2点、堆積土から土師器坏21点・甕91点・壺1点・製塩土器5点、須恵器坏5点・壺15点・大甕42点、砥石1点、鉄製品4点、ビット堆積土から土師器甕1点、須恵器大甕1点、床構築土から土師器坏3点・甕26点、須恵器坏1点・壺2点・大甕1点が出土している。外周溝1堆積土から土師器坏7点・甕23点、須恵器坏2点・壺7点・大甕7点、砥石2点、羽口2点が出土している。土師器甕破片は第135号溝跡出土のものと同様。図20-3の土師器坏は破損面が擦られており、口縁部欠損後に再利用されたと考えられる。図20-16の土師器坏は第126号竪穴住居跡外周溝1炭化物層出土の破片と接合している。胎土は緻密で、焼成は良好で、硬質である。口縁部には粘土が乾燥する前の水様状のうちに手を触れた痕跡がみられ、ロクロによる器壁の凹凸が顕著で、第126号住居跡外周溝1から出土した土師器(図46-2~7)と同様のものと考えられる。図20-11は土師器壺片で、ロクロ使用で、再調整はみられない。胎土は他の土師器に比べ緻密で、焼土粒・砂粒・石英粒が混入し、焼成は良好で硬質である。図22-1は須恵器大甕の胴部片で、外面は平行叩き、内面には円礫状の当て具の痕跡がみられる。硯に転用されている。図22-3は須恵器大甕の胴部片であるが、周囲が両面から打ち欠かされている。同様の須恵器片はこの他にも遺構外から数点出土しているが、用途などは不明である。図22-8は雁又式の鉄鏝で、床面から出土している。図22-12は容器状を呈する土製品であるが、用途は不明である。掘り方から出土している。上部が破損しており、全体形は不明である。手づくね成形で、外面には指痕がみられる。上部はヘラなどの工具で横方向に削り取られ、ナデられている。穿孔は先端が丸い工具の回転によるものと考えられる。

小結 本住居跡は拡張がおこなわれた住居跡である。第107Ⅱ号住居跡を南西方向に拡張して第107Ⅰ号住居跡を構築している。第107Ⅱ号住居跡は一辺7.6mと比較的大型の住居跡であるが、主柱穴の有無は不明で、壁際に柱穴はほとんどみられない。第107Ⅰ号住居跡は一辺8.6mの大型の住居跡で、



图20 第107号竖穴住居跡 (2)

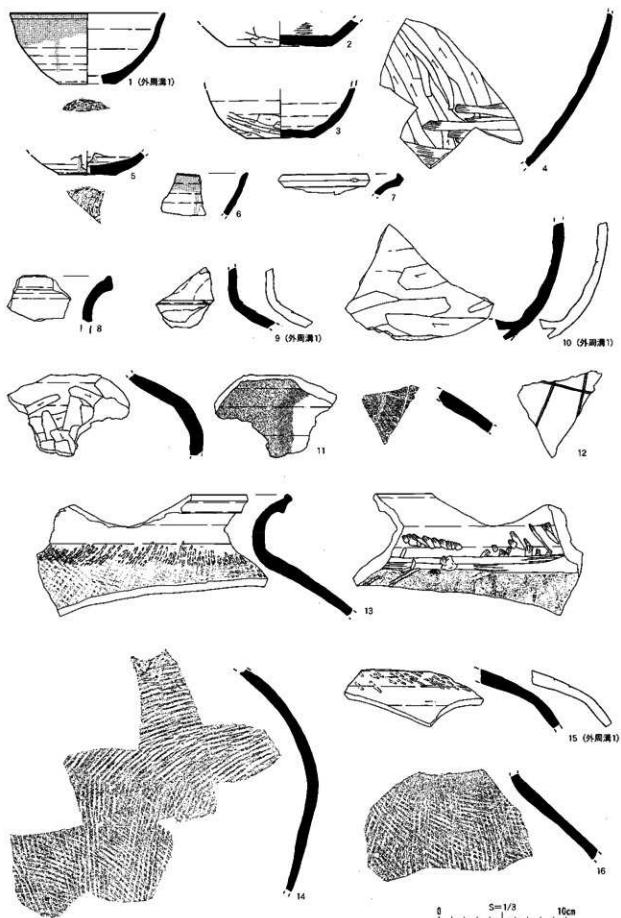


図21 第107号竪穴住居跡 (3)

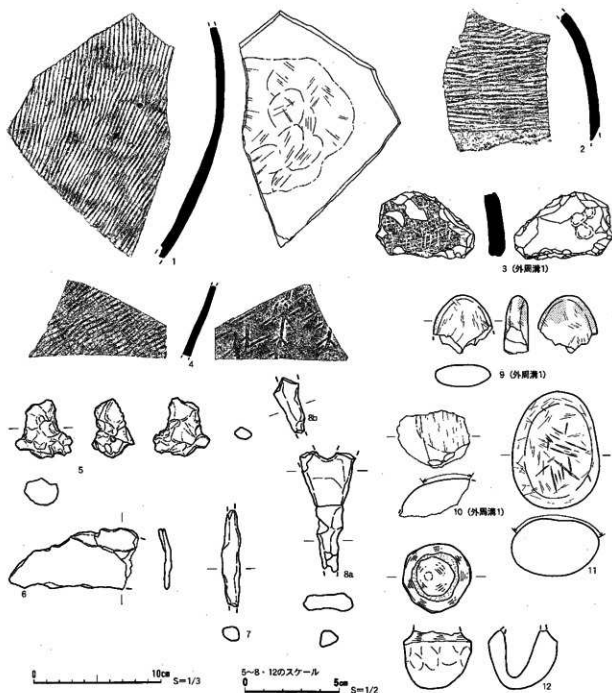


図22 第107号竪穴住居跡(4)

周溝と4本の支柱穴・四隅と壁際に柱穴をもつ構造である。第107Ⅱ号住居跡の構造については不明な部分もあるが、住居を拡張しようとした際に、従来の構造では不十分なため、支柱穴をもつ構造に変えた可能性が考えられる。本住居跡の時期は、外周溝2の堆積土に白頭山火山灰が混入することや重複する第108号住居跡の最も古い床構築土に白頭山火山灰がみられることなどから、10世紀中葉以後と考えられる。

(田中)

第108号竪穴住居跡 (図23)

【位置・確認】AR・AS-34~36グリッドに位置し、標高約33mである。第V層上面で硬化面と焼土を検出した。

【重複】第107号竪穴住居跡及び外周溝と重複し、本住居跡が古い。第111 I号竪穴住居跡外周溝・第123号溝跡・第128~130号土坑と重複し、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】西壁・南壁・北壁の一部が検出された。西壁は7.0mで、平面形は方形と考えられる。住居跡の軸方向はN-2°-Eである。

【堆積土】10層に分層された。ローム・炭化物が混入する黒褐色土を主体とする。床構築土の第9・10層に白頭山火山灰が混入する。

【床面】東側に硬化面が検出された。床面は3枚あり、いずれもロームや炭化物が混入する黒褐色土を強く踏みしめ、床面としている。硬化面はそれぞれ1.7×0.9m、1.9×1.2m、1.9×1.2mの範囲で不整形を呈する。西側では周溝検出面がほぼ床面であったと考えられる。

【カマド】硬化面上で焼土が検出され、カマドの痕跡と考えられる。焼土は162×63cmの不整形の範囲にひろがる。

【柱穴】2基検出された(ピット1・2)。北西隅に位置する。

【周溝】幅10~38cm、検出面からの深さ7~27cmの周溝が部分的に検出された。また、西壁から1.6~2.2m東側に幅11~30cm、検出面からの深さ1~20cmの溝が検出された。本住居跡の拡張前の周溝の可能性と間仕切り溝の可能性が考えられるが、床面と東壁が残存しないため詳細は不明である。

【ピット】3基検出された(ピット3~5)。

【土坑】位置的に第128~130号土坑が本住居跡の住居内土坑の可能性が考えられる。

【出土遺物】床面から土師器杯1点・甕1点、須恵器杯2点、堆積土から土師器杯4点・甕9点・埴1点、須恵器大甕1点が出土している。図23-5は土師器場で、やや丸みを帯びながら立ち上がる器形で、口縁はやや外反する。口縁部にはヨコナデが施されるが、下位には指痕がみられる。

【小結】周溝には改築の明確な痕跡はみられず、床面の貼り替えのみをおこなったと考えられる。本住居跡は床構築土に白頭山火山灰がみられることから、白頭山火山灰降下以後の構築と考えられる。

(田中)

第109 I号竪穴住居跡 (図24・25)

【位置・確認】AK-27・28グリッドに位置し、標高は約34.5mである。第VII層上面で確認された。東に向かって緩く傾斜する地形のため、東側約半分の壁及び床面は残存しない。

【重複】第109 II号竪穴住居跡を拡張した住居跡で、第110号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】本住居跡は、第109 II号竪穴住居跡と東壁を共有し、残る3方向に拡張して構築した住居跡である。南壁4.6m、残存する東壁3.6m、西壁4.4mである。北壁は削平のためか残存しない。壁高は東壁0cm、西壁3~15cm、南壁8~12cmでやや開きながら立ち上がる。北壁が検出されなかったため平面形は不明であるが、南側の主柱穴と壁との距離を参考にすると、方形と推測される。推定される床面積は約19㎡、軸方向はN-12°-Eである。

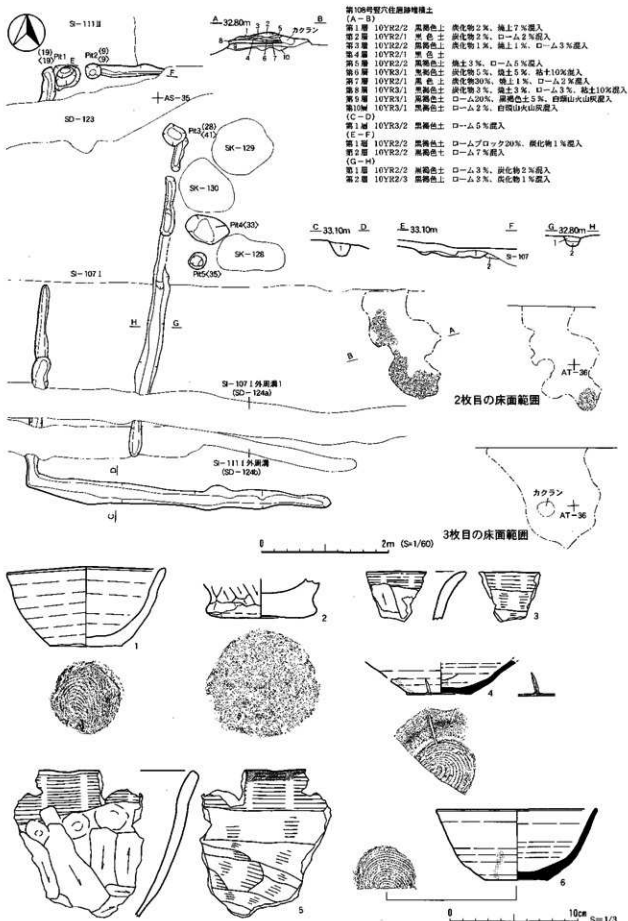


図23 第108号竪穴住居跡

【堆積土】7層に分層され、このうち第109Ⅰ号竪穴住居跡の堆積土は第1～6層である。暗褐色土を主体とする。第5層は粘土にロームブロックや暗褐色土を混入した掘り方の埋土である。

【床面】南壁付近では第Ⅳ層を直接床面とし、それ以外では漸移層を掘り込んで第6層土で平坦な床面をつくっている。

【カマド】東壁南寄りから火床面を検出した。カマドの主軸方位はS-82°-Eである。火床面は90×50cmの楕円形を呈し、中央に径40cm程度の硬化・黄変範囲がみられる。袖・煙道部等は残存しない。

【柱穴】東壁の周溝沿いと西壁から約70cm内側に位置するピット1～4が主柱穴と考えられる。ピット1・3・4は一辺約50cmの方形のプランをもち、ピット2のみ40×30cmの長方形を呈する。深さは約60cmである。ピット1と3の堆積土からは幅10cmの柱痕が確認されている。ピット2・4のプランからも長さ約30cm、幅10cmの柱痕がみられ、方形の掘り方中に南北方向に長い長方形の柱を主柱として用いたことがわかる。ピット4のプランはほぼ柱痕そのものということになるが、掘り方の埋土を掘り残した可能性もある。また、ピット2と4の柱痕に黄褐色土が堆積することから、住居廃絶時に柱が抜き取られ、少なくとも2本の主柱穴を埋め戻したと考えられる。

【周溝】東・西・南壁から、幅12～40cm、深さ5～30cmの周溝が確認された。

【ピット】ピットは8基検出された（ピット5～11・15）。ピット9～11については第109Ⅱ号竪穴住居跡に付属する可能性もある。ピット15は周溝上に位置し、柱穴となる可能性もあるが、対応するピットがみられないことから、本住居跡に伴わない可能性がある。

【出土遺物】床面から土師器甕片10点、鉢片1点、ピット内から土師器甕片1点、坏1点、堆積土中から土師器甕片12点、須恵器坏片1点が出土した。このうち、土師器坏1点、甕片2点を図示した。図25-1はピット5の堆積土から、伏せた状態で出土した。口縁部は楕円形に歪み、内面には暗赤褐色を呈するタール状の付着物がみられる。自然科学分析の結果、この付着物はそれほど精製されていない状態の透明漆であることが判明した（第3章第6節）。漆の付着は内底面のほか歪んだ長軸方向の体部内面で著しく、筆のようなものをこすりつけて余分な漆液を落とすためと推定され、歪んだ坏をパレットとして利用したと考えられる。

【小結】第109Ⅱ号竪穴住居跡と重複し、それより古い第110号竪穴住居跡のピット堆積土中に白頭山火山灰が堆積することから、本住居が構築されたのは10世紀中葉以降と考えられる。（水谷）

第109Ⅱ号竪穴住居跡（図24・25）

【位置・確認】AK-27・28グリッドに位置し、標高は約34.5mである。第109Ⅰ号竪穴住居跡の床構築土を除去したところ、本住居跡の周溝及びピットを確認した。

【重複】第109Ⅰ号竪穴住居跡・第110号竪穴住居跡と重複し、第109Ⅰ号竪穴住居跡より古く、第110号竪穴住居跡より新しい。

【平面形・規模】壁は検出されなかったが、周溝から東・西・北壁3.2m、南壁3.4mの方形を呈する。周溝に囲まれた床面積は8.7㎡、軸方向はN-12°-Eである。

【堆積土】7層に分層され、このうち本住居跡の堆積土と考えられるのは周溝堆積土にあたる第7層のみである。ロームを主体とする人為堆積の様相を呈する。

【床面】本住居跡の床面は検出されなかった。第109Ⅰ号竪穴住居跡構築時に敷されてつくり直された

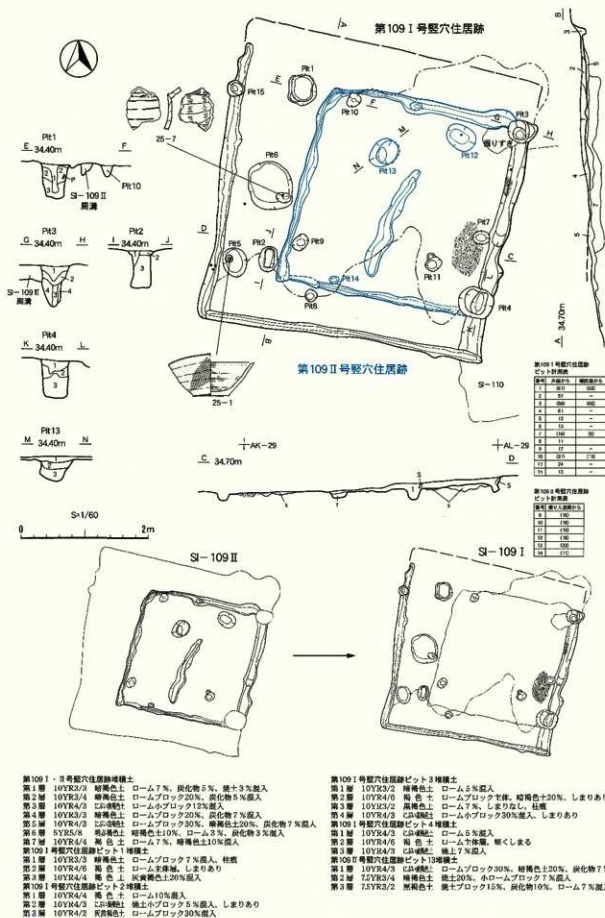


図24 第109 I・II号竪穴住居跡(1)

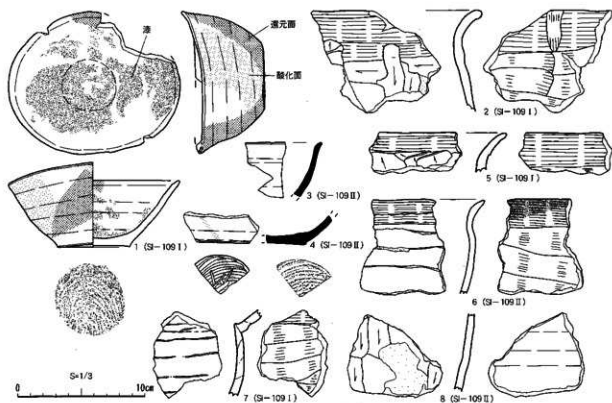


図25 第109号 I・II 竪穴住居跡 (2)

と考えられる。

〔カマド〕本住居跡のカマドは検出されなかったが、住居拡張時に東壁だけは拡張されなかったことから、東壁にあった可能性が高い。

〔柱穴〕ビット9・10が本住居跡に付属する柱穴の可能性はある。ビット9は24×20cm、ビット10は30×20cmの楕円形を呈する。

〔周溝〕一巡する。北壁の東側約半分と、第109 I号竪穴住居跡の周溝と一致する東壁の周溝は幅14～42cmと幅広である。それ以外では平均幅15cmの細い溝が巡る。掘り方底面から周溝底面までの深さは4～17cmである。このほか住居跡のほぼ中央から、南北に走る長さ1.9m、幅16～24cm、深さ4～7cmの住居内溝を検出した。間仕切りなどの用途を持つものか、掘り方の一部は不明である。

〔ビット〕ビットは4基検出された(ビット11～14)。このうち、ビット12～14は第109 I号竪穴住居跡の床構築土の除去後に検出された。

〔出土遺物〕出土遺物は土師器甕片2点、須恵器坏片2点、ビット堆積土から土師器甕片1点である。図25-6は1～2cm毎の輪積痕が明瞭な土師器小型甕である。頸部は強く屈曲している。図25-4の須恵器坏の底部には、回転糸切によって回転台から切り離した後、幅1.5mmの工具を縦横に押し引いた痕跡がみられる。

〔小結〕本住居跡と重複し、本住居跡より古い第110号竪穴住居跡のビット堆積土中に白頭山火山灰が堆積することから、本住居跡が構築されたのは10世紀前葉以降と考えられる。(水谷)

第110号竪穴住居跡(図26)

[位置・確認] AL-28グリッドに位置し、標高は約34.5mである。第Ⅷ層上面で確認した。東に向かって緩く傾斜する地形で、削平を受けているため南壁の一部と南壁付近の床面以外は掘り方で確認した。

[重複] 第109 I・II号竪穴住居跡、第117号土坑と重複し、本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 西壁は4.2m、残存する南壁は3.8m、北壁1.2mである。壁高は西壁1~4cm、南壁5cmと僅かなため立ち上がりは観察できない。本住居跡は各壁の四隅に主柱穴を配するため、主柱穴間の距離から規模を測定すると東壁4.1m、南壁4.4m、北壁4.5m、平面形はカマドのある南北壁が僅かに長い方形となり、床面積は約16.6㎡と推測される。主軸方向はN-8°-Wである。

[堆積土] 2層に分層された。第1層は周溝堆積土である。第2層は掘り方の埋土と思われるが、掘り方下の第Ⅵ層土の可能性もある。

[床面] 重複及び削平により、カマド付近の南西側が残存するのみである。その部分では第Ⅷ層を直接床面としている。

[カマド] 南壁の西寄りに構築されている。カマドの主軸方位はS-6°-Eである。削平のため、両袖の基部と支脚を検出したのみである。袖は第Ⅷ層土に浅黄色粘土を混入してつくられている。左袖は長さ70cm、幅48cm、高さ5cm、右袖は長さ70cm、幅26cm、高さ5cmで、両袖の間隔は42cmを測る。両袖間に火床面は見られないが、中央に土師器甕の底部を切断して倒立させた支脚が検出された。煙道部は攪乱によって削平されているが、周囲の床面と同じ高さの前底部から、支脚の南側で4cmの段を有して底面が上昇することから、煙道部は半地下式構造であったと考えられる。また、カマド周辺には袖構築土と同質の粘土範囲が検出されており、崩落した天井部粘土とみられる。袖の内側・天井部の崩落土が焼けていないこと、火床面が形成されていないこと、支脚として設置された土師器甕の内側に、前底部側にのみ僅かに変色範囲が観察されることから、短期間もしくは稀にししかカマドを使用しなかった可能性がある。

[柱穴] 周溝上の住居跡コーナーにあるビット2~5が主柱穴と考えられる。ビット2・3・5は径約40cmの不整形形で床面からの深さは約50cm、カマド脇に位置するビット4はやや小ぶりで径30cm、深さ32cmを測る。ビット2は底面の中央に径16cmの窪みがあり、柱痕とみられる。ビット3は堆積土の観察から、中央部に幅10cmの柱痕がみられる。このほか、南北壁を2分する位置からビット7・8が検出された。2基とも径30cm未満で主柱穴よりひとまわり小さく、主柱穴を補助する役割をもつものと思われる。

[周溝] 北壁の一部、西壁、南壁から幅10~22cm、深さ1~13cmの周溝を検出した。

[ビット] ビットは5基検出された(ビット1・6・9~11)。ビット2に隣接するビット1は自然堆積とみられ、底面近くから白頭山火山灰粒が検出されている。確認面は住居跡床面より下位であるため、ビット1が明確に本住居跡に伴うとは言い難いが、ビット1の堆積土とビット2の第1層が同質に観察されることから、本住居跡産絶よりビット1は新しくはないと思われる。ビット9~11は埋められていたビットで、本住居跡に伴わない可能性もある。ビット11はカマド左袖の下から検出された。

[出土遺物] 土師器甕片がカマド底面から2点、堆積土中から1点出土した。このうち、図26-1はカマドの支脚として使用されていたもので、底部から5~7.5cmの高さで切断されている。底辺部には明瞭な括れがみられ、括れの上位に輪積み痕が観察される。図26-2は同一個体の胴部とみられ、

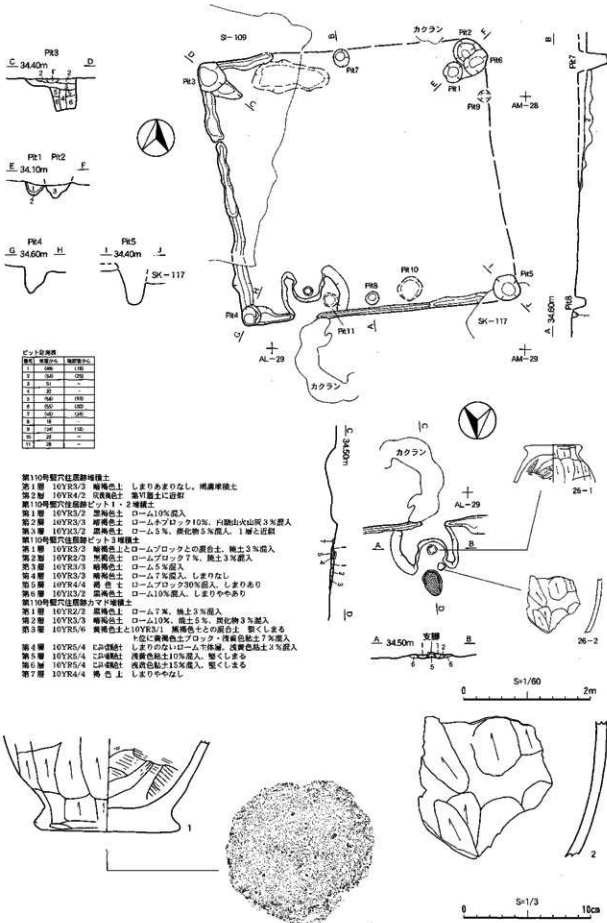


図26 第110号竪穴住居跡

磨滅している。袖の芯材と考えられる。

【小結】ピット1の底面近くから白頭山火山灰が少量検出されていることから、本住居跡の廃絶は白頭山火山灰降下以前の10世紀前葉と考えられる。(水谷)

第111号竪穴住居跡(図27)

位置・確認 AQ・AR-34・35グリッドに位置し、標高約33mである。第Ⅶ層上面で床面と周溝を、第107号竪穴住居跡外周溝2底面で周溝とピットを検出した(第111Ⅰ号竪穴住居跡)。この他に第107号住居跡掘り方底面・第147号溝跡底面でも周溝とピットが検出され、第107Ⅰ号住居跡の間仕切り溝、第111号住居跡の拡張前の住居跡、または間仕切り溝などの可能性が考えられた。しかし、第107Ⅰ号住居跡の外側に位置するピット(ピット6)を柱穴の一部と考えると、ほぼ正方形を呈すること、軸方向が第111号住居跡の軸方向とはずれることなどから、新たな住居跡とした(第111Ⅱ号竪穴住居跡)。第111Ⅰ号住居跡の床下で第111Ⅱ号住居跡の周溝の一部が検出されたことから、第111Ⅰ号住居跡が新しく、第111Ⅱ号住居跡廃絶後に構築されたと考えられる。以下にそれぞれの詳細を述べる。

第111Ⅰ号竪穴住居跡

【平面形・規模】西壁・南壁・北壁の一部が検出された。西壁は6.4mと推定され、平面形は方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は南壁1~13cm、北壁3~14cmである。住居跡の軸方向はN-7°-Eである。

【重複】第107号竪穴住居跡および外周溝・第108号竪穴住居跡、第123・137・147・152号溝跡と重複し、第108号住居跡・第137号溝跡との新旧関係は不明だが、本住居跡は第152号溝跡より新しく、他の遺構より古い。外周溝(第136・124b号溝跡)は第107号竪穴住居跡及び外周溝、第108号竪穴住居跡、第123・135・137・147・152・153・175・198・226号溝跡と重複する。本住居跡外周溝は第135・152・153・226号溝跡より新しく、第107号住居跡、第123・147・175・198号溝跡より古い。第108号住居跡、第137号溝跡との新旧関係は不明である。

【堆積土】床構築土と周溝堆積土の3層が確認された。

【床面】西側と南壁西側に床面が残存する。ほぼ平坦であるが、東側に約30cm傾斜する。南側では床面はロームブロックと粘土ブロックが混入する黒褐色土で構築されているが、北側では第Ⅶ層をそのまま床面としている。

【カマド】検出されなかった。

【柱穴】4基検出され(ピット1・2・4・5)、ピット4・5が支柱穴と考えられる。それぞれの壁から1.0~1.2m内側に位置する。ピット4は床下で確認された。54×50cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは31cm、床面からの深さは33cmである。ピット5は70×43cmの楕円形を呈し、床面からの深さは47cmである。ピット4・5の柱間距離は3.5mである。ピット1・2は周溝内に位置する。

【周溝】幅7~46cm、深さ7~22cmの周溝が一巡すると考えられる。

【ピット】1基検出された(ピット3)。第111Ⅱ号住居跡に伴う可能性もある。

【外周溝】第136・124b号溝跡が外周溝と考えられる。住居南側から西側・北側にかけてコの字状に巡る。住居から1.4~2.0m離れている。幅19~120cm、深さ6~56cmである。両端では幅が狭く、断面形は浅い逆台形状を呈するが、中央部分では幅広で断面形は深い逆台形状~V字状を呈する。堆

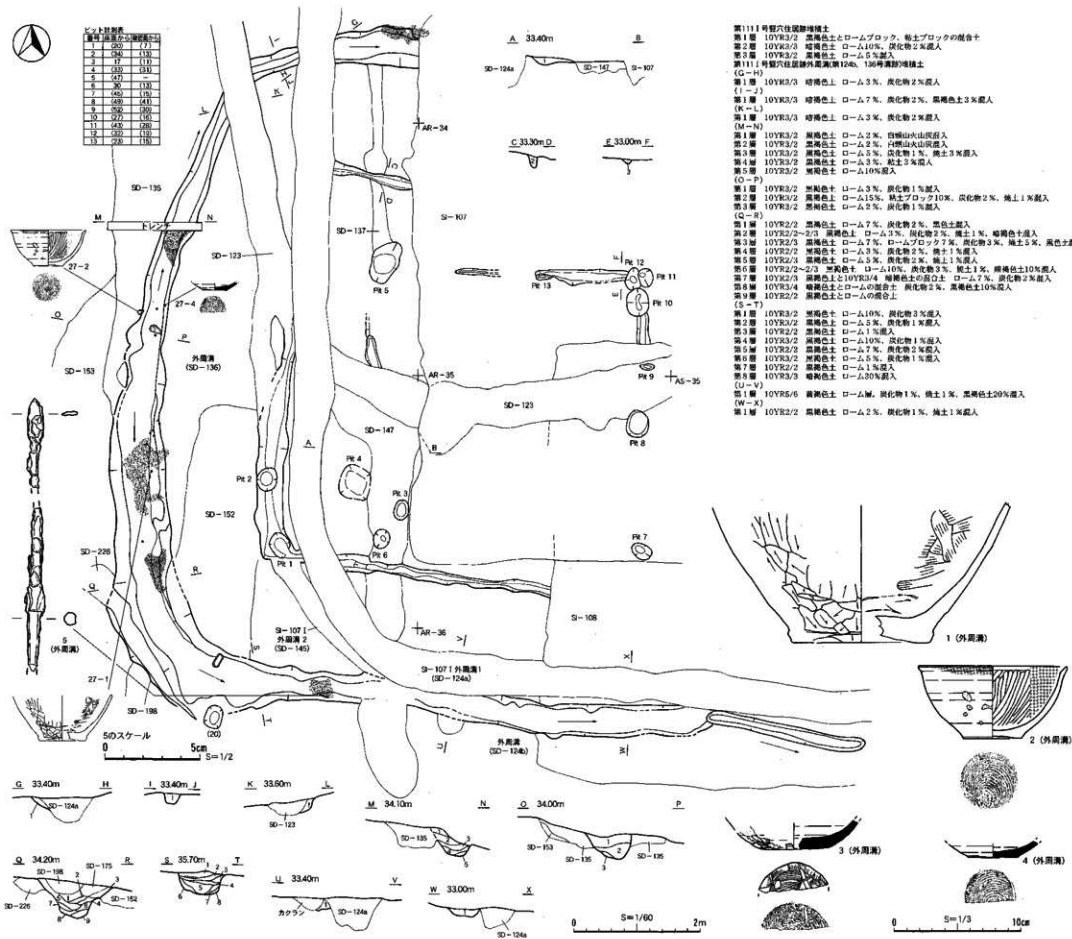


図27 第111号竪穴住居跡

積土はロームと炭化物が混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。堆積土最上層に白頭山火山灰が混入するが、流れ込みと考えられる。本外周溝は住居跡の軸方向や規模などから、第111Ⅱ号住居跡には伴わず、住居つくり替えの際に構築されたものと考えられる。

第111Ⅱ号竪穴住居跡

【規模・平面形】平面形はビット5～7・11を四隅とする方形と推定される。東壁4.5m、西壁4.4m、南壁4.5m、北壁4.5mで、推定床面積は19.2㎡である。住居跡の軸方向はN-0°-Eである。

【重複】第107・108号竪穴住居跡、第123・147号溝跡と重複する。第108号住居跡との新旧関係は不明だが、本住居跡は他の遺構より古い。

【堆積土】確認できたのは周溝堆積土のみである。

【床面】検出されなかった。

【カマド】検出されなかった。

【柱穴】8基検出された(ビット6～13)。ビット10～13は周溝内に、これ以外は壁際に位置すると考えられる。このうちビット6・7・11・12は住居隅に位置する。北西隅にはビット5が位置するが、他の柱穴に比べ、規模が大きく深いため、本住居跡に伴うものではなく、本住居跡に伴う柱穴は第111Ⅰ号住居跡構築の際に壊されたと考えられる。

【周溝】幅8～24cm、深さ2～7cmの周溝が部分的に検出された。

【ビット】第111Ⅰ号住居跡ビット3が本住居跡に伴う可能性がある。

出土遺物 住居跡からは周溝堆積土から土師器甕1点、床構築土から土師器甕1点、外周溝堆積土から土師器甕12点、須恵器杯1点・壺2点・大甕1点、鉄製品1点が出土している。図27-2の土師器杯はロクロ使用で、内面は放射状のミガキの後、黒色処理が施される。外面には火ハジケがみられる。図27-3の須恵器杯は、回転糸切りによって底部を切り離した後、ナデの再調整が施される。図27-5の鉄製品は断面方形であるが、先端部は扁平で、やや幅広である。鑿根式の鉄鏃と考えられる。

小結 第111Ⅰ号住居跡は4本の主柱穴と四隅に柱穴をもつ構造と考えられ、外周溝が付属する。第111Ⅱ号住居跡は四隅に柱穴をもつ構造と考えられる。同一の場所に住居を作り替えていることから、2軒の住居は同一世帯による可能性が高い。本住居跡の時期は、第111Ⅰ号住居跡外周溝より新しい第198号溝跡が白頭山火山灰降下以前の遺構であることから、白頭山火山灰降下以前の9世紀後半から10世紀前半の年代が考えられる。

(田中)

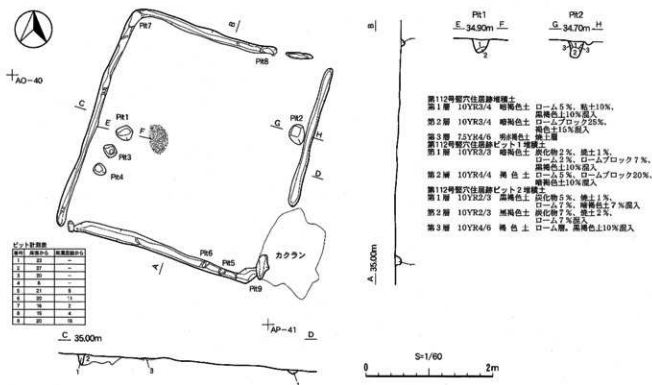


図28 第112号竪穴住居跡

第112号竪穴住居跡 (図28)

〔位置・確認〕 AO・AP-39・40グリッドに位置し、標高約34.5mである。第Ⅶ層上面で周溝と床面を検出した。

〔規模・平面形〕 東壁3.8m、西壁3.7m、南壁3.7m、北壁3.3mで、平面形は方形を呈する。床面積は10.9㎡である。住居跡の軸方向はN-21°-Eである。

〔堆積土〕 周溝堆積土と床構築土の2層に分層された。

〔床面〕 ほぼ平坦であるが、東に傾斜している。第Ⅶ層を床面とするが、東側はロームブロックが混入する暗褐色土で構築されている。

〔カマド〕 西壁ほぼ中央に火床面のみを検出した。火床面は50×28cmの楕円形を呈し、3cmの深さまで被熱し、赤変している。

〔柱穴〕 4基(ピット5～9)は周溝内に位置し、床面からの深さは15～21cmである。

〔周溝〕 幅7～21cm、深さ2～25cmの周溝がほぼ一巡する。

〔ピット〕 4基検出された(ピット1～4)。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 出土遺物が少ないため、時期については明確ではなく、9～10世紀と考えられる。(田中)

第113号竪穴住居跡 (図29~31)

【位置・確認】 AP・AQ-38・39グリッドに位置し、標高約34mである。第Ⅶ層上面で黒褐色土の方形のプランとして確認した。

【重複】 第186・203号溝跡と重複し、本住居跡は第186号溝跡より古い。第203号溝跡との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】 北東壁4.1m、北西壁4.0m、南西壁4.0m、南東壁4.0mで、平面形は方形を呈する。検出面からの壁高は北東壁6~23cm、北西壁20~31cm、南西壁23~33cm、南東壁6~21cmで、壁は開きながら立ち上がる。床面積は12.5㎡である。住居跡の軸方向はN-44°-Wである。

【堆積土】 16層に分層された。黒褐色土を主体とする。第5層には十和田a火山灰が少量混入する。第4層は炭化材層で、第5層には炭化物・焼土が混入し、焼失家屋と考えられる。炭化物は北西壁から南西壁にかけて多く検出され、腰板と考えられる板材やこれを押さえていたと考えられる横木が検出された。炭化材は中央部ではあまり検出されず、柱や屋根材と考えられるものは検出されなかった。

【床面】 ほぼ平坦であるが、北東側に約10cm傾斜している。床面は褐色粘土で構築されている。掘り方底面には緩やかな起伏があり、住居東側が深く掘り込まれている。

【カマド】 南東壁西側に位置する。袖と火床面が残存していた。袖は粘土で構築され、左袖は長さ69cm・幅11~16cm・高さ14cm、右袖は長さ43cm・幅12~18cm・高さ12cmで、壁に対してハの字状にやや開く。袖の上面および内面は被熱により赤変している。火床面は58×50cmの不整楕円形を呈し、6cmの深さまで赤変している。火床面奥には支脚の環が伏せた状態で出土した。カマドの主軸方位はS-42°-Eである。

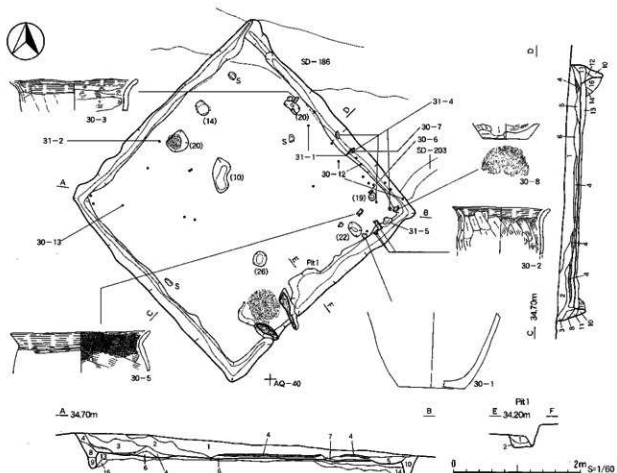
【柱穴】 検出されなかった。

【周溝】 幅13~31cm、深さ8~37cmの周溝が壁直下を一巡する。

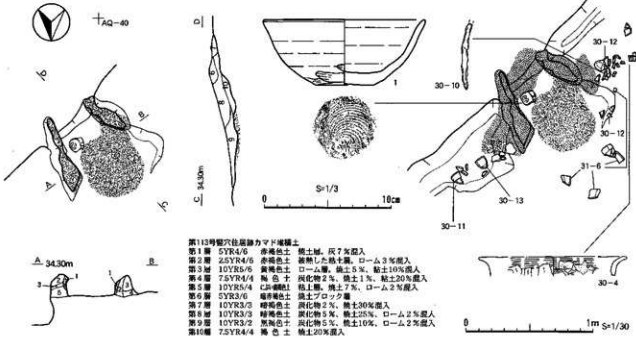
【ピット】 8基検出された。ピット1はカマドの北側に位置し、周溝とつながっている。55×52cmの方形で、深さは21cmである。土師器片が4点出土している。

【出土遺物】 遺物は炭化材層の4層及び床面から多く出土し、平面的には東隅に集中している。床面から土師器坏1点・甕19点、須恵器坏1点、カマドから土師器坏1点・甕13点、鉄製品1点、炭化材・焼土が混入する第4・5層からは土師器坏3点・甕26点、砥石1点、これ以外の堆積土から土師器坏5点・甕20点、須恵器坏2点・壺2点・大甕4点、鉄滓1点、ピット堆積土から土師器甕4点、床構築土から土師器甕1点が出土している。遺物の多くは床面または第4・5層から出土しており、これらは流れ込みなどによるものではなく、本住居跡に伴うものと考えられる。しかし、復元できた個体数が少なく、復元状況もあまりよくない。また、他の遺構に比べると、須恵器の出土数が少なく、焼失する前に片付けた可能性がある。図29-1はカマド支脚に利用されていた土師器坏で、底辺部にナデがみられる。図30-11・12は同一個体で、ロクロ使用の土師器甕である。胴部から口縁部にかけてほとんどふくらみをもたず、口縁部だけが外反する器形と考えられる。胴部より下位にはナデが施される。

【小結】 本住居跡は周溝のみで柱穴をもたない構造である。本住居跡は焼失家屋であるが、住居内を片付けた後で火をかけた可能性がある。炭化材14点の樹種同定をおこなったところ、1点を除きクリと判明した(第3章第4節参照)。堆積土に十和田a火山灰がみられることから、本住居跡の時期は、十和田a火山灰降下後から白頭山火山灰降下前の10世紀前半と考えられる。(田中)



- 第113号竪穴居跡増築土
- | | |
|--|--|
| 第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1%, 焼土1%, ローム5%, ロームブロック1%混入 | 第9層 10YR3/2 黒褐色土と粘土の混合土 ローム2%混入 |
| 第2層 10Y2D/2 暗褐色土と粘土の混合土 炭化物1%, 焼土1%, ローム5%混入 | 第10層 10YR4/4 褐色土 粘土の砂層 |
| 第3層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物2%, ローム3%, 焼土3%混入 | 第11層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1%, 焼土1%, ローム5%混入 |
| 第4層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物2% | 第12層 10YR4/4 褐色土 粘土の砂層, 焼土7%, ローム3%混入 |
| 第5層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%, 焼土15%, ローム5%, 粘土5% | 第13層 10YR4/4 褐色土 粘土, ロームブロック2%, 炭褐色土5%混入 |
| 第6層 10YR3/2 黒褐色土と粘土の混合土 炭化物2%, ローム1%混入 | 第14層 10YR3/2 暗褐色土と粘土の混合土 ローム1%, 焼土1%混入 |
| 第7層 10YR3/4 暗褐色土とロームの混合土 | 第15層 10YR2/1 黒色土とロームブロック, 粘土の混合土 |
| 第8層 10YR3/2 黒褐色土と粘土の混合土 炭化物1%, ローム3%混入 | 第16層 10YR3/2 黒褐色土と粘土の混合土 ロームブロック30%混入 |
| | 第17層 10YR4/4 褐色土 粘土, 炭化物5%, 焼土10%混入 |



- 第113号竪穴居跡方マッド増築土
- | |
|--|
| 第1層 5YR4/6 赤褐色土 焼土, 灰7%混入 |
| 第2層 2.5YR4/6 赤褐色土 焼した粘土層, ローム3%混入 |
| 第3層 10YR5/6 黒褐色土 ローム層, 焼土5%, 粘土10%混入 |
| 第4層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物2%, 焼土1%, 粘土20%混入 |
| 第5層 10YR5/4 赤褐色土 粘土層, 焼土7%, ローム2%混入 |
| 第6層 5YR3/6 暗褐色土 粘土ブロック層 |
| 第7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物2%, 焼土30%混入 |
| 第8層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物5%, 焼土25%, ローム2%混入 |
| 第9層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物5%, 焼土10%, ローム2%混入 |
| 第10層 7.5YR4/4 褐色土 粘土20%混入 |

図29 第113号竪穴住居跡 (1)

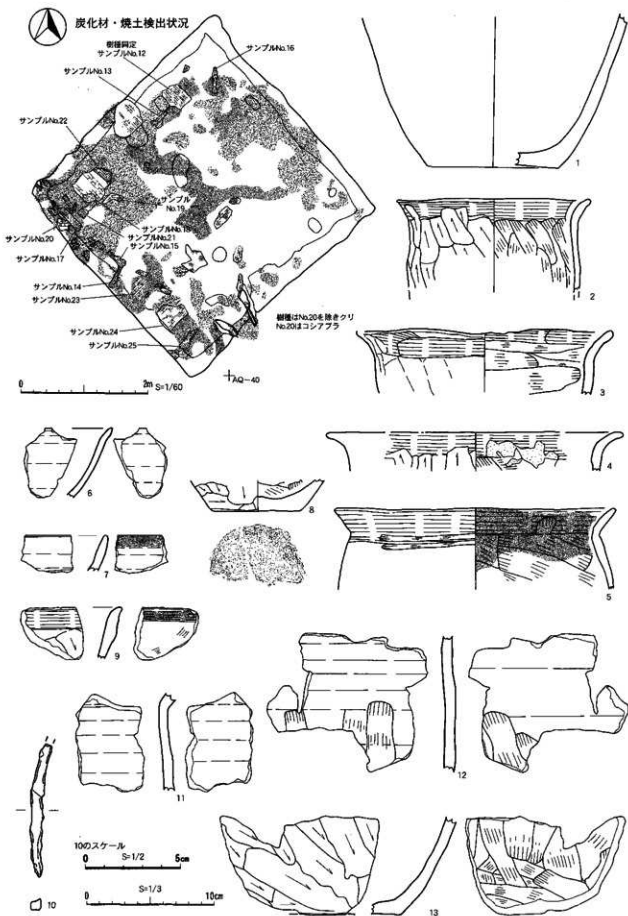


図30 第113号竪穴住居跡 (2)

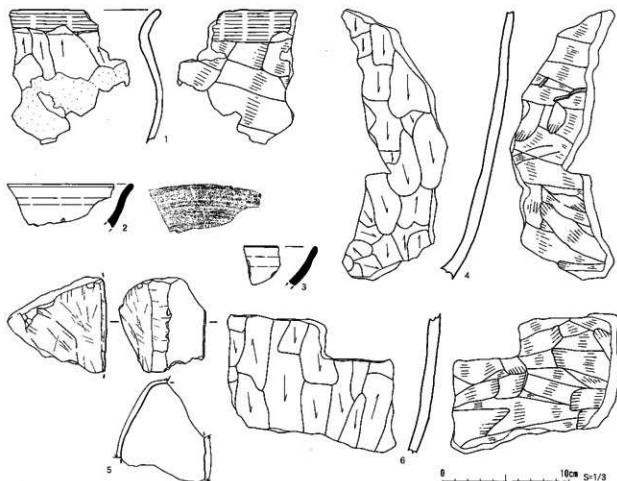


図31 第113号竪穴住居跡(3)

第114号竪穴住居跡(図32)

[位置・確認] AQ・AR-41・42グリッドに位置し、標高約34mである。第Ⅶ層上面で黒褐色土の方形のプランとして確認した。南西半は調査区外にのびる。

[重複] 第180号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

[規模・平面形] 北壁と西壁の一部が検出された。検出された長さは西壁2.4m、北壁4.4mである。北壁東端は第180号溝跡と重複し、途切れる。平面形は方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は西壁8～10cm、北壁0～2cmである。主軸方位はN-0°-Eである。

[堆積土] 10層に分層され、黒褐色土を主体とする。床面直下に長さ5.0m、幅10～62cmの溝状に白頭山火山灰が堆積していた。火山灰の厚さは最大12cmにも及ぶ。火山灰上面は堅く締まっており、土層断面の観察によると、火山灰上面は第4層上面より5cm盛り上がっている。また、第4層上面も非常に堅く締まっており、当時の生活面の可能性が考えられ、火山灰は本住居跡に伴うものではなく、上面が堅く締まっていることから道跡の可能性が考えられる。

[床面] 西側のみ検出された。ロームが混入する暗褐色土で構築されている。平坦であるが、やや東に傾斜している。第4層上面も非常に堅く締まっているが、西側で検出されている床面との比高差が32cmもあり、本住居跡の床面とは考えにくく、西側以外は削平されたと考えられる。

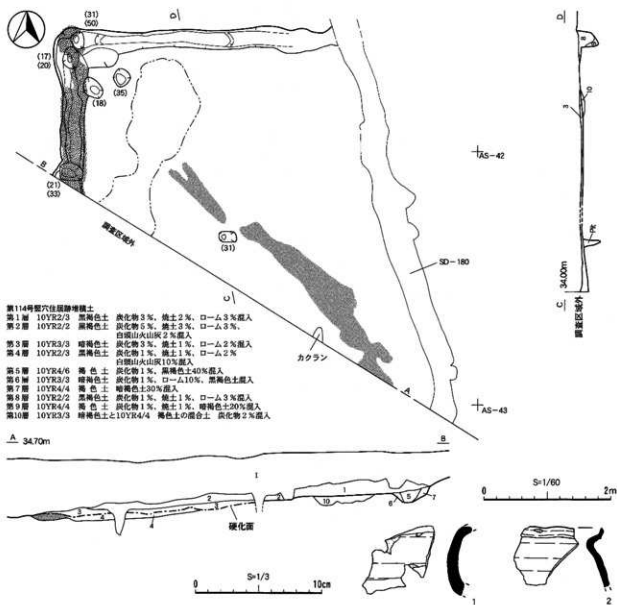


図32 第114号竪穴住居跡

[カマド] 検出されなかった。

[柱穴] 3基検出された。2基は北西隅に、1基は周溝内に位置する。

[周溝] 幅11~60cm、深さ11~29cmの周溝が壁直下を一巡する。北壁の周溝の壁から周溝の埋め土と考えられる粘土が検出された。

[ピット] 3基検出された。

[出土遺物] 破片数で、堆積土から土師器坏3点・甕8点、須恵器壺2点・大甕3点・鉢1点が出土している。土師器甕は第171号溝跡出土のものと接合している。

[小結] 第4層で検出された白頭山火山灰は本住居跡廃棄後に床面が削平され、構築された遺構と考えられる。本住居跡は白頭山火山灰降下以前に構築・廃棄された可能性が考えられ、時期は10世紀前半頃と推定される。

(田中)

第115号竪穴住居跡（図33・34）

【位置・確認】AW・AX-45グリッドに位置し、標高は31.5mである。第V層上面で白頭山火山灰を小ブロック状に混入する方形のプランを確認した。段を有する畑地の境界地に位置するため、東側の壁は削平されている。

【重複】第102号掘立柱建物跡、風倒木痕と重複し、風倒木痕より新しい。第102号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

【平面形・規模】壁長は西壁3.1m、北壁3.4m、東壁1.4m、南壁2.7mで、壁高は西壁40～54cm、北壁27cm、東壁0～17cm、南壁0～27cmでやや開きながら立ち上がる。平面形はほぼ方形で、カマドのある南北壁が若干長い。軸方向はN-24°-Wである。残存する床面積は7.6㎡を測り、柱穴の位置から推定される全体の床面積は約8㎡である。

【堆積土】11層に分層された。暗褐色土と黒褐色土とで構成され、自然堆積の様相を呈する。第1～3・5層に白頭山火山灰をブロック状に混入する。第8層はロームブロックを主体とする床構築土で、堅く踏みしめられている。第9～11層は掘り方の埋土で、第10層中には和田a火山灰をブロック状に混入する。第3層には炭化物がまばらに混入し、住居跡北東隅付近には56×36cmの楕円形を呈する炭化物混じりの灰層が検出された。灰と炭化物に混じて土器や礫も出土した。

【床面】カマド周辺の南西隅は第Ⅷ層を直接床面としているが、それ以外では凹凸のある掘り方をもち、その上位に黄褐色土のロームブロックを主体とする床構築土を貼って平坦に整えている。床面の高さは概ね平坦である。

【カマド】南壁の西寄りから検出された。カマドの主軸方位はS-17°-Eである。煙道部に攪乱を受けているものの残存状態は比較的良好である。両袖は褐色の粘土を床面上に貼って構築されており、左袖は長さ83cm、幅13～22cm、高さ4～14cm、右袖は長さ80cm、幅20～24cm、高さ5～24cmである。両袖の間隔は約50cmあり、中央には50×35cmの縦長の楕円形を呈する火床面がみられる。火床面のほぼ中央には、25×12cmの横長の楕円形の黄変範囲が認められた。かなり硬化しており、使用頻度の高かったことが窺える。煙道部は半地下式構造で、煙道部底面は住居壁より約20cm手前で2～8cmの段を有したのち、緩やかに立ち上がる。煙道部の規模は長さ80cm、幅37cmで、燃焼部から煙道部へ至る段の部分で、カマド内部の幅が約半分狭くなっている。燃焼部を囲む両袖内側は被熱して赤褐色化している。カマドの堆積土は16層に分層される。第6・10～13層は崩落したカマド天井部の堆積層で、一部被熱している。第9層は煙道部堆積土とみられ、焼土や炭化物を混入するしまりのない層が堆積する。第15・16層は火床面で、床面である第Ⅷ層が厚い部分で12cmにわたって赤褐色化している。

【柱穴】北壁の周溝上に位置するピット1が柱穴と考えられ、上端は径35cmの方形気味の円形、下端は28×25cmの方形を呈する。床面からの深さは53cmで、内側へ僅かに傾いて立ち上がる。

【周溝】西壁と北壁から、幅30～44cm、深さ7～15cmの周溝が検出された。

【ピット】ピットは2基検出された（ピット2・4）。ピット2は住居跡南西隅に位置し、周溝と接する。56×36cmの楕円形を呈し、床面からの深さは10cm、周溝底面からの深さは2cmである。ピット4は南壁際に位置し、80×38cm、深さ13cmの不整楕円形を呈する。住居跡南東隅の削平の影響を受けている可能性もある。

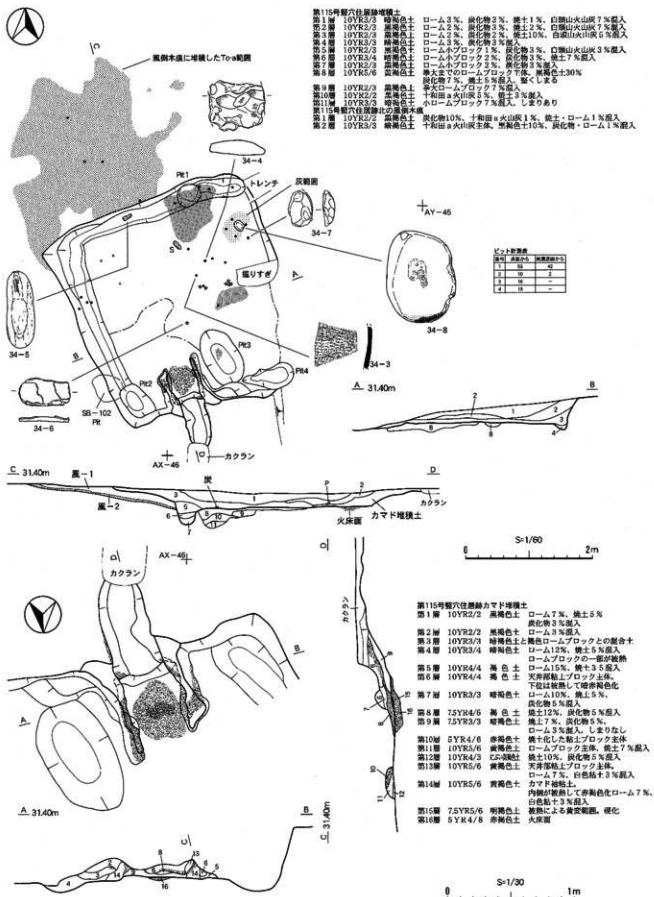


図33 第115号竪穴住居跡(1)

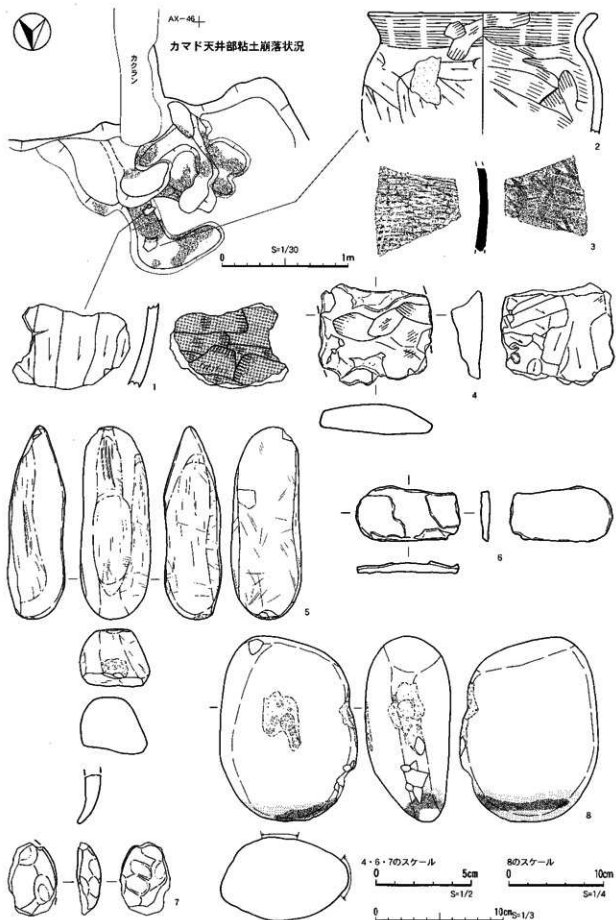


図34 第115号竪穴住居跡(2)